宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第187集

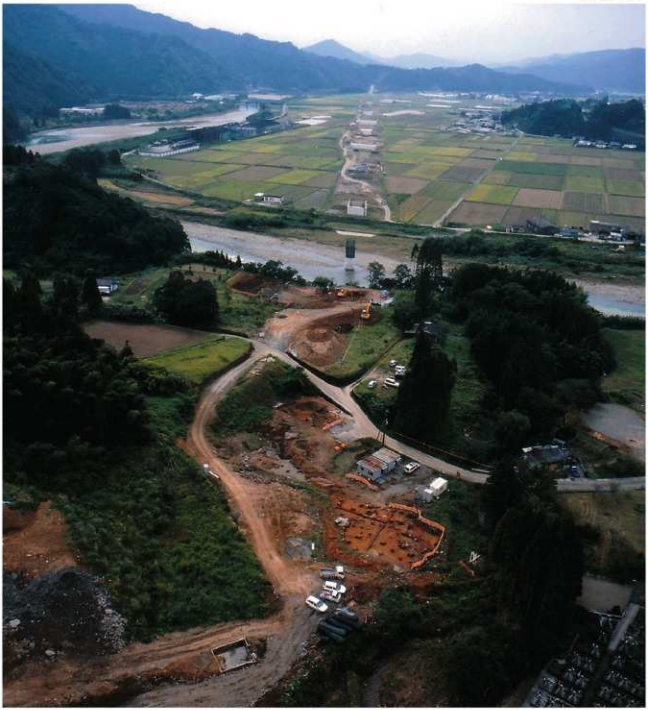
宮鶴（みやづる）第２遺跡

Miyazuru No.2 Site

東九州自動車道（清武～日南間）建設に伴う埋蔵文化財センター発掘調査報告書1

2010年

宮崎県埋蔵文化財センター



宮鶴第2遺跡遠景①
遺跡北側から郷之原地区の平野部(南方向)をのぞむ

宮鶴第2遺跡遠景②
遺跡南側から猪八重方面(北方向)をのぞむ

調査区全景(遺跡上方から)

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（清武～日南間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成 19 年度から実施しております。本書は、その発掘調査報告書であります。

本書に掲載した宮鶴第２遺跡は、平成 19 ～ 20 年度に発掘調査を行い、縄文時代早期の集石遺構や散礫、土坑などの遺構や旧石器時代、縄文時代、弥生時代、中世、近世の様々な遺物を確認することができました。特に、日南市で初めて旧石器時代の遺物が出土したことと確認例の少なかった集石遺構や散礫の記録ができたことは、郷土の歴史を解明する大きな成果と言えるでしょう。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々に対して厚くお礼申し上げます。

平成２２年２月

宮崎県埋蔵文化財センター
所　長　　福　永　展　幸

例　　言

1　本書は、東九州自動車道新直轄区間（清武～日南間）建設に伴い、平成20年度に実施した日南市（旧北郷町）所在の宮鶴第２遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、国土交通省九州地方整備局宮崎河川国道事務所の委託により宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。

3　現地での実測・写真撮影等の記録は、主に崎田一郎、黒木誠司、松本茂が行った。

4　整理作業は、遺物洗浄・注記を崎田一郎、黒木誠司が行い、接合を整理作業員が行った。実測は土器を整理作業員と崎田、石器を整理作業員と松本茂が行った。トレースは整理作業員と崎田、松本が行った。また、石器類の分類や石材同定は松本が行った。なお、本書で使用した遺物写真は、崎田が撮影した。

5　次の業務はそれぞれ業者に委託した。
　基準点測量　：（有）松田測量設計事務所
　空中写真撮影　：（有）ふじた

6　本書で使用した周辺遺跡位置図は国土地理院発行の５万分の１図をもとに、周辺地形図等は、国土交通省から提供の1,000分の１図をもとに作成した。

7　国土座標は旧平面直角座標系Ⅱ（日本測地系）に基づく。なお、本書で使用した方位は座標北（Ｇ．Ｎ．）であり、その他「Ｍ．Ｎ．」と記載しているものは磁北（磁針方位は西編約6.0°）である。また、標高は海抜絶対高である。

8　土層断面・土器等の色調については農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』による。

9　本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。
　ＳＨ…ピット

10　本書の遺構及び遺物実測の縮尺は明記しているが、主なものについては一部例外を除いて次のように統一している。
　集石遺構・散礫…１／20　　土坑（縄文時代）…１／40　　土坑・ピット（近世以降）…１／30
　縄文土器・石斧・敲石・弥生土器・陶磁器・鞴羽口…１／３　（陶磁器の一部は１／６）
　銭貨・金属製品・砥石…１／２　　旧石器・石匙・石錐・剥片…２／３　　火打石…１／１

11　本書の執筆・編集は、崎田が担当した。

12　出土遺物、その他の諸記録は宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに
第１節　調査に至る経緯……1
第２節　調査の組織……1
第３節　遺跡の位置と環境……1

第Ⅱ章　遺跡の概要
第１節　確認調査の概要……4
第２節　調査の方法と調査の経過……5
第３節　整理作業及び報告書作成……6

第Ⅲ章　調査の記録
第１節　遺跡の層序……8
第２節　旧石器時代の遺物……11
第３節　縄文時代の遺構と遺物……11
第４節　弥生時代の遺物……18
第５節　中世の遺物……21
第６節　近世以降の遺構と遺物……21

第Ⅳ章　まとめ……28

挿図目次

第１図　遺跡位置図……3
第２図　確認調査出土遺物実測図……4
第３図　周辺地形及び確認調査トレンチ位置図……5
第４図　周辺地形図……7
第５図　グリッド配置図……7
第６図　Ａ区土層断面図（１）……8
第７図　Ａ区土層断面図（２）……9
第８図　Ｃ区土層断面図……9
第９図　Ｂ区土層断面図……9
第10図　全体遺構分布図……10
第11図　旧石器時代遺物実測図……11
第12図　散礫分布図……11
第13図　１号集石遺構・散礫実測図……13
第14図　土坑（縄文時代）実測図……14
第15図　縄文土器（早期）分布図……14
第16図　旧石器・石器（縄文時代）分布図……15
第17図　１号集石遺構出土遺物実測図……15
第18図　包含層出土遺物実測図（１）……16
第19図　包含層出土遺物実測図（２）……17
第20図　包含層以外の出土遺物（縄文時代）実測図……17
第21図　遺物（弥生時代）実測図……18
第22図　遺物（中世）実測図……21
第23図　土坑・ピット（近世以降）実測図……21
第24図　遺物（近世以降）実測図（１）……23
第25図　遺物（近世以降）実測図（２）……25
第26図　縄文時代早期土器重量割合図……28

表 目 次

第１表　座標一覧表 …… 7
第２表　基本層序（Ａ・Ｃ区）…… 8
第３表　基本層序（Ｂ区）…… 8
第４表　土坑（縄文時代）観察表 …… 14
第５表　土器観察表 …… 19～20
第６表　石器観察表 …… 20
第７表　土坑・ピット（近世以降）観察表 …… 22
第８表　中世以降陶磁器観察表 …… 26～27
第９表　銭貨・金属製品・土製品・石製品観察表 …… 27

図 版

巻頭図版１　宮鶴第２遺跡遠景①
遺跡北側から郷之原地区の平野部（南方向）をのぞむ
巻頭図版２　宮鶴第２遺跡遠景②
遺跡南側から猪八重方面（北方向）をのぞむ
調査区全景（遺跡上方から）
図版１　Ａ区全景（遺跡上方から）…… 31
Ｂ区全景（遺跡上方から）
図版２　調査区全景（南東から）…… 32
Ａ区全景（北東から）
Ａ区中央トレンチ東西方向土層断面（南西から）
Ａ区中央トレンチ南北方向土層断面（北西から）
Ｂ区全景（南から）
Ｂ区中央トレンチ土層断面（北東から）
図版３　散礫検出状況（南東から）…… 33
１号集石遺構検出状況（北から）
散礫内遺物出土状況（北西から）
散礫内遺物（土器）出土状況（東から）
散礫内遺物出土状況（東から）
図版４　１号土坑完掘状況（北から）…… 34
２号土坑完掘状況（南東から）
３号土坑完掘状況（北から）
４号土坑検出状況（南東から）
Ａ区完掘状況（北東から）
Ｂ区完掘状況（西から）
作業風景
台風13号の雨で水没したＢ区
図版５　確認調査出土遺物 …… 35
旧石器時代遺物
図版６　１号集石遺構出土遺物 …… 36
縄文時代早期出土遺物１
図版７　縄文時代早期出土遺物２ …… 37
縄文時代早期出土遺物３
包含層以外の出土遺物（縄文時代）１
包含層以外の出土遺物（縄文時代）２
包含層以外の出土遺物（縄文時代の石器・弥生土器）
中世の遺物（青磁）
図版８　近世以降の遺物　磁器（肥前系）１ …… 38
近世以降の遺物　磁器（肥前系）２
近世以降の遺物　磁器（肥前系）３
近世以降の遺物　磁器（肥前系）４
近世以降の遺物１
近世以降の遺物２
近世以降の遺物　片口
近世以降の遺物（銭貨・金属製品・土製品・石製品）

第Ⅰ章　はじめに

第1節　調査に至る経緯

東九州自動車道清武～日南は、清武ＪＣＴから日南ＩＣに至る総延長28㎞に及ぶ高規格幹線道路で、平成10年12月に施行命令がおり、平成15年12月の国土開発幹線自動車会議において有料道路方式から新直轄方式に替わる区間に選定された。

本区間の埋蔵文化財取扱い協議は、平成8年度から日本道路公団（現西日本高速道路株式会社）と宮崎県教育委員会との間で始まり、平成9年度に予定区間内の分布調査が県教育委員会で実施され、結果は『東九州自動車道関連遺跡詳細分布調査報告書3（清武～日南間）』として刊行されている。

中心杭打設開始後、平成13年8月に日本道路公団（現西日本高速道路株式会社）九州支社長より宮崎県教育長あてに清武・日南間の埋蔵文化財分布調査の依頼があり、道路計画予定地内に宮鶴第2遺跡を含む、周知の埋蔵文化財包蔵地3箇所と試掘調査が必要な3箇所の計6箇所、約29,000㎡の遺跡、協議箇所を確認し、その旨日本道路公団九州支社長に回答を行った。

新直轄区間移行後、平成18年7月に国土交通省九州地方整備局宮崎河川国道事務所と協議を行い、今後の発掘調査のスケジュール等の調整を行い、平成19年7月から宮鶴第2遺跡の用地取得箇所の確認調査を実施していった。

確認調査の結果、宮鶴第2遺跡の本調査は、約1,600㎡の範囲を対象に実施することになり、平成20年5月23日付けで、国土交通省九州地方整備局宮崎河川国道事務所長から埋蔵文化財発掘通知が提出され、同年6月9日付けで宮崎県教育長から発掘調査の指示が出され本調査を実施することになった。

第2節　調査の組織

宮鶴第2遺跡の調査組織は次のとおりである。

【調査主体】 宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

平成19年度

所　長	清野　勉
副所長	加藤　悟郎
総務課長	宮越　尊
同主幹兼総務担当リーダー	高山　正信
調査第一課長	長津　宗重
同副主幹兼調査第一担当リーダー	南中道　隆
同調査第一担当主査	崎田　一郎
同調査第一担当主査	吉野　達三
同調査第二担当主任主事	堀田　孝博
同調査第一担当主事	古田　陽
同調査第一担当主事	佐竹　智光
事業調整担当（文化財課）主査	飯田　博之

平成20年度

所　長	福永　展幸
副所長	加藤　悟郎
副所長 兼総務課長	長友　英詞
同主幹兼総務担当リーダー	高山　正信
調査第一課長	長津　宗重
同副主幹兼調査第一担当リーダー	南中道　隆
同調査第一担当主査	崎田　一郎
同調査第一担当主査	黒木　誠司
同調査第一担当主任主事	松本　茂
事業調整担当（文化財課）主査	飯田　博之

平成21年度

所　長	福永　展幸
副所長 兼総務課長	長友　英詞
同主幹兼総務担当リーダー	高山　正信
調査第一課長	長津　宗重
同副主幹兼調査第一担当リーダー	飯田　博之
同調査第一担当主査	崎田　一郎
同調査第一担当主任主事	松本　茂
事業調整担当（文化財課）主査	日髙　広人

〔調査協力〕

北郷町教育委員会

宮崎県東九州自動車道用地事務所

第3節　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

日南市北郷町（平成21年4月1日、南郷町とともに日南市と合併）は宮崎県南部に位置し、郷之原・大藤・北川内の3地区で構成されている。東部を600ｍ前後の鵜戸山地、北西部を鰐塚山地（最高峰は鰐塚山〔標高1,118ｍ〕）、南西部を小松山（標

高 988 m）に囲まれ、町域の約 8 割を山林が占める。鰐塚山を源として東流する広渡川は猪八重渓谷から南流する猪八重川と郷之原地区の北部で合流し、そこから約 500 m東に進んだ山際で向きを南に変え、西側に広がる稲作地帯へ農業用水を供給しつつ、日南市街地へと流れる。

宮鶴第 2 遺跡は、広渡川と猪八重川の合流地点の北岸に位置する。遺跡は南向きのゆるやかな斜面に立地し、遺跡の東に郷谷山と谷之城山の谷から発する渓流が流れる。

2　歴史的環境

本遺跡の西に隣接する宮鶴地区集落は、平成元年度に北郷町が実施した分布調査で集落のほぼ全域が埋蔵文化財包蔵地「宮鶴遺跡」に指定され、縄文時代と中世の散布地となっている。また、本遺跡の北西にそびえる花立山（標高 489.4 m）の南に広がる台地には大原遺跡と笹の窪遺跡が立地する。平成 3 ～ 4 年に北郷町教育委員会の発掘調査で大原遺跡から縄文時代の早期土器（塞ノ神式、平栫式）、両遺跡から石鏃が出土した。

「北郷」の地名は、建久 8（1197）年の『日向国図田帳写』に島津荘寄郡として「飫肥北郷」400 町、地頭島津忠久の記載が見られる。また、応永 28（1421）年の『五郡田代注文写』にも 400 町の記述が見られ、島津荘日向方との関係から鎌倉期には北条氏の支配が及んでいたことが考えられる。

本遺跡の南に広がる平野を挟んで対面する坊主山（標高 405 m）の麓には郷之原城址が立地する。『日向地誌』の中で平部嶠南は「西北石崎山ヲ負ヒ深谷嶮岨東北ノ一ノ瀬川ヲ控ヘ壁立十餘丈東ト南ハ平原ニ連ナル區域畫テ五區トナル第一區北ニアリ廣三段第二區其南ニアリ廣一段五畝第三區又其南ニアリ廣一段五畝第四區又其東北ニアリ廣一段第五區又其東ニアリ廣三段其間縦横ニ壕隍ヲ通シ要害ヲ固フス隍幅皆四五間今已ニ半ハ埋レトモ深キハ三四丈浅キハ一二丈壁壘猶存ス」と曲輪や空堀の備えられた城の構造を記している。

郷之原城は中世から合戦の舞台となり、『長谷場文書』では北郷の収納使・弁済使職をめぐって水間氏と長谷場氏との争いが続いたことが記されている。郷之原城は「北郷石崎城」や「北郷ノ城」とも呼ばれ、『土持文書』で康安 2（1362）年に北朝方の一色範親が「飫肥北郷石崎城」の攻撃に参加した土持時栄の戦功を賞したことや『日向記』で貞治 4（1365）年に北郷ノ城が陥落したことが記されている。

戦国時代になると伊東氏と島津氏の争いとなり、天文 10（1541）年に島津氏は羽島越後守と宇宿小次郎を郷之原地頭とし郷之原城に入れた。天文 14（1545）年、羽島・宇宿両氏は伊東方に寝返り、川崎三河守が郷之原城に入城している（『日向記』）。その後郷之原城は島津方に度々攻められ、天正 5（1577）年には、伊東氏と島津氏の板挟みにあった肝付氏が伊東氏と談合して偽合戦を行っている。この合戦は両方の兵に情報が十分に伝わってなかったために伊東氏の大勝で終わっている（『箕輪伊賀覚書』）。

江戸時代になると飫肥藩領となり藩役所が生津倉（現一ノ瀬地区）と仮谷（現中央地区）に置かれた。村は上郷ノ原と下郷ノ原の 2 つに分けられ、それぞれに地頭と庄屋が置かれた。また、交通面では、大藤村に抜ける飫肥街道が村の中心部を通るほか、北川内村に向かう小潮・蜂ノ巣往還、富士村・伊比井村に向かう富士越、板敷村に抜ける富士腹間道が通っていた。中でも富士腹間道は飫肥城北門の要衝であったため、一般の往来が禁じられ、登り口に番所が置かれ足軽が警備にあたっていた。

明治期には明治 4（1871）年に飫肥県、都城県を経て同 6 年に宮崎県、同 9 年に鹿児島県、同 16（1883）年に再び宮崎県に属している。明治 22（1889）年北郷村となり、昭和 34（1959）年に北郷町となった。昭和 40 年代まで農業が主な産業であり、本遺跡周辺も昭和 16 年に柑橘植栽のための果樹園として整備され、戦後は杉の植林がなされていた。

【引用参考文献】

- 北郷町教育委員会 1993 『笹の窪遺跡　大原遺跡』北郷町文化財調査報告書第 3 集
- 北郷町教育委員会 1990 『北郷町遺跡詳細分布調査報告書』
- 平部嶠南　1929『日向地誌』 日向地誌刊行会
- 竹内理三　1986 『角川日本地名大辞典・45　宮崎県』角川書店
- 平凡社地方資料センター　1997 『宮崎県の地名・日本歴史地名体系・46　宮崎県』平凡社

1	宮鶴第２遺跡	2	曽和田遺跡	3	柿ヶ迫遺跡	4	大原遺跡
5	笹の窪遺跡	6	年見遺跡	7	稲荷免遺跡	8	上村遺跡
9	生津倉遺跡	10	宮鶴遺跡	11	合原遺跡	12	宮の元遺跡
13	郷之原城址	14	妙満寺遺跡	15	水ヶ城址	16	北上床遺跡

第１図　遺跡位置図(S=1/50,000)

第Ⅱ章　遺跡の概要

第１節　確認調査の概要

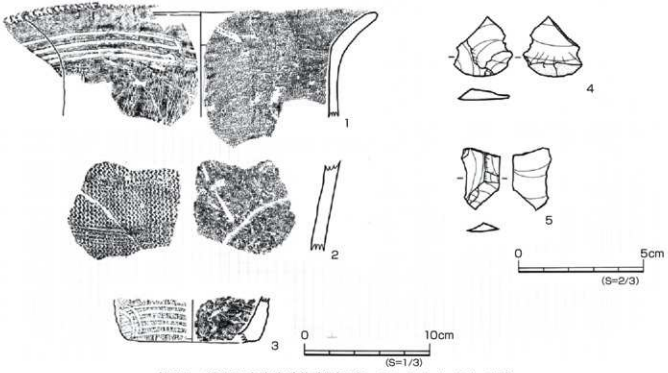
宮鶴第２遺跡は、9,200 ㎡を測る。本センターは調査面積を確定するために平成 19 年度に３回、平成 20 年度に１回の確認調査を行った。

一次確認調査は、平成 19 年７月２日～７月 11 日に遺跡中央部分の面積 3,691 ㎡を対象に 11 本のトレンチ（155 ㎡）を設定して行った。その結果、遺構は検出されなかったが、Ｔ２から塞ノ神式（第２図 1,2）を含む土器片４点と剥片（4）１点、Ｔ３から剥片（5）１点、Ｔ９から連続した貝殻腹縁刺突文を施したもの（3）を含む土器片３点が出土した。また、土層を観察したところ、調査区内のアカホヤは２次堆積の可能性が強く、その下の遺物包含層も灰褐色や黄褐色のブロックが多数混入していることから流水の影響を受けての堆積層であることが確認された。これらの結果を受けて、面積に対して遺物の出土率が低いという判断をし、一次確認調査範囲を遺跡から除外した。

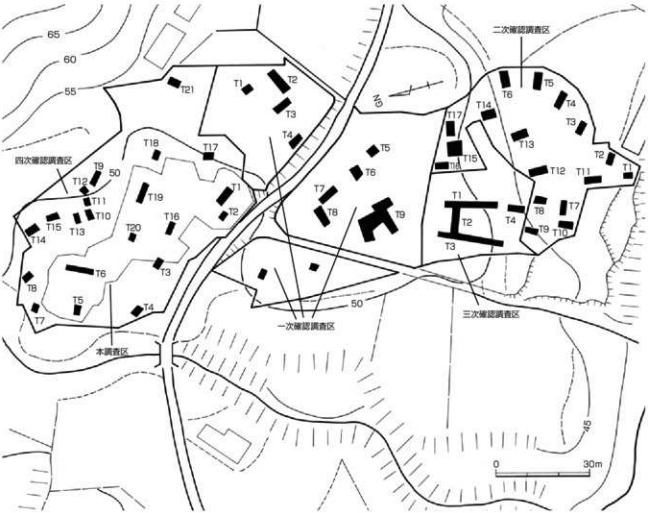
二次確認調査は、平成 19 年９月 25 日～９月 26 日に遺跡南東部分の面積 1,887.25 ㎡を対象に 17 本のトレンチ(58 ㎡)を設定して行った。その結果、Ｔ７、Ｔ８、Ｔ10、Ｔ11、Ｔ15 の５箇所で流水の影響で多数の灰褐色土や黄褐色土のブロックや小石が混入したアカホヤの堆積が見られた。一方、その他のトレンチは客土の直下が礫層もしくは水田に見られる粘土層であった。今回は、遺構・遺物の存在が得られなかったことから二次確認調査範囲を遺跡から除外した。

三次確認調査は、平成 19 年 12 月 10 日～ 12 月 11 日に遺跡南西部分の面積 1,008 ㎡を対象に４本のトレンチ（53 ㎡）を設定して行った。土層を観察したところ、二次調査区と同様、流水の影響で多数のアカホヤブロックや小石が混入した褐色土の堆積が見られた。また、遺物も表採した染付碗（近世後半）と石臼のみであった。以上の結果から三次確認調査範囲も遺跡から除外することとなった。

四次確認調査は、平成 20 年５月７日～５月８日に遺跡北部に残された対象範囲 1,942 ㎡に 21 本のトレンチ（262 ㎡）を設定して行った。その結果、調査区南部のＴ１のアカホヤ下位のロームと推定される明褐色土層から赤化礫の集中する範囲が検出され、縄文時代早期の遺構の存在が確認された。また、Ｔ５・Ｔ６ではピットが検出され、近世の陶磁器片も出土した。以上の結果から、Ｔ１・Ｔ５・Ｔ６を含む範囲から確認調査によるトレンチ等の面積を除外した 1,680 ㎡を本調査面積として設定した。



第2図　確認調査出土遺物実測図(1～3 S=1/3, 4～5 S=2/3)



第3図　周辺地形及び確認調査トレンチ位置図(S=1/1,200)

第２節　調査の方法と調査の経過

四次確認調査の結果を受けて、本調査を行った。なお調査の便宜上北側調査区をＡ区、南側調査区をＢ区、中央部分をＣ区に区分した。グリッド設定は、長辺を１～８、短辺をＡ～Ｄとして国土座標方向ではなく、細長い調査区の方向に沿わせた。

Ａ区は枝木や切り株を除去した後、重機で表土剥ぎを行った。調査はトレンチで包含層の残存状況と堆積状況を確認し、土層断面図作成後、アカホヤ上面を精査することで遺構の検出を行った。その結果、土坑２基、ピット 12 基が確認できた。また、西側部分は、表土から深さ 120 ～ 130 ㎝の面で土を突き堅め、その上に盛り土をした造成面が確認された。遺物は、縄文時代の石斧や黒曜石の剥片などがアカホヤ（Ⅲ層）から出土した。このことから周辺にこの時代の遺跡の存在が予測された。その他、造成面の客土中より近世の陶磁器も出土している。

Ｂ区は、住宅地として利用されていた土地であった。重機で住宅の解体に伴う廃棄物等を除去した後、表土剥ぎを行った。調査は、Ａ区と同様トレンチで遺構と包含層の位置と広がり、残存状況・堆積状況を確認し、土層断面図作成後、アカホヤ（Ⅲ層）下の褐色土（Ⅳ層）の精査を中心に実施した。その結果、谷地形の緩斜面部分から集石遺構１基と散礫、土坑２基を検出した。集石遺構・散礫の埋土からは、貝殻条痕文が施された縄文土器や石器が出土した。また、Ⅱ層（アカホヤ混じりの明褐色土）からは、中世の青磁が出土している。

Ｃ区では、表土剥ぎの後、土層断面図とⅢ層上面で等高線図を作成した。その後、遺構・遺物の確認を目指して平面精査を行ったが、遺構・遺物とも確認されなかった。

遺跡の遺構等の記録は、現地において実測図の作成と写真撮影で行った。また、遺物と散礫は、光波トランシットで位置と標高を記録した。遺構実測図は1/10、1/20、遺構分布図は1/100を基本にして作成した。写真記録は中判カメラ（6×6）と35mmカメラでモノクロームとリバーサルの2種類のフィルムによる記録を中心に行い、随時デジタルカメラを併用して発掘作業の細部の記録ができるよう努めた。また、遺跡の地理的立地状況や周辺の自然環境を記録するため、空中写真撮影も実施した。

調査期間は、平成20年8月4日から平成20年10月10日で、総調査日数は、41日間であった。

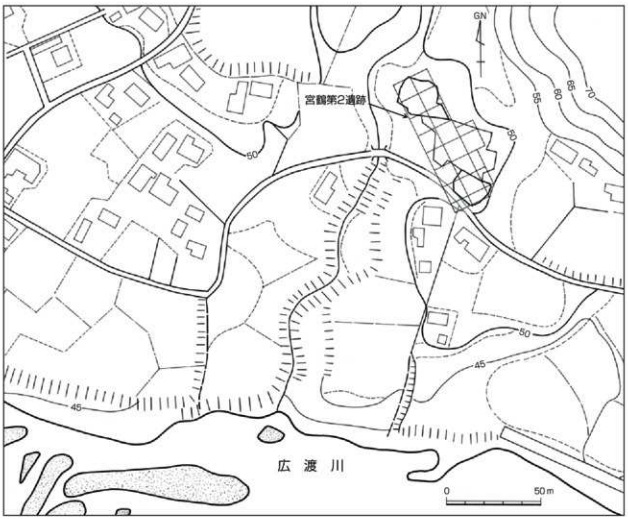
調査日誌抄

08.04　調査開始。表土剥ぎ開始。
08.05　排土置き場整地。
08.06　事務所・器材庫・トイレ設置。グリッド杭設置。水道工事終了。
08.07　電気工事終了。
08.11　発掘作業員雇用開始。A区トレンチ設定。調査区外周へのフェンス設置。
08.12　A区の平面精査を開始。駐車場に再生クラッシャーランを敷設。
08.19　B区に先行トレンチを入れる。包含層から縄文時代早期の土器が出土。
08.20　B区で平面精査を行う。包含層から集石遺構、散礫の一部を検出。
08.21　A区の平面精査を行う。弥生土器、陶磁器片が出土。
08.25　A区はⅢ層（二次堆積アカホヤ火山灰層）上面、BではⅣ層（縄文時代早期遺物包含層）上面の検出作業が終了。A区Ⅲ層から黒曜石の剥片が出土。
08.26　A・B区で写真撮影。A区等高線図作成。
08.28　C区でⅢ層（二次堆積アカホヤ火山灰層）上面検出作業を行う。B区で散礫の検出作業と等高線図作成。
09.02　C区等高線図作成。A区でⅢ層上面の平面精査を実施、土坑1基とピット12基を検出。
09.04　A区で手鍬によるⅢ層の掘削を開始、石鏃2点が出土。B区散礫実測図作成。
09.08　B区平面土層分布図作成。
09.10　B区でⅣ層の掘削開始。同層から剥片1点が出土。
09.11　A区柱穴実測図作成。
09.12　A区柱穴実測図、遺構分布図作成。
09.16　B区Ⅳ層上面等高線図作成。B区Ⅳ層から土器の出土が増えてくる。台風13号接近。
09.17　台風養生を行う。
09.22　引き続きA区Ⅲ層、B区Ⅳ層の掘削を行う。A区土層断面図作成。
09.24　A・B区写真撮影。
09.25　A区Ⅲ層面の掘削が終了、土坑1基を検出したほかⅤ層上面から旧石器時代の剥片1点が出土。
09.26　A区中央トレンチ・B区東側土層断面図、A区検出土坑・ピット実測図作成。
09.29　台風15号接近、台風養生。
10.01　集石遺構、散礫実測図作成。
10.02　A区で土坑完掘後、実測図作成。空中写真撮影準備。
10.03　空中写真撮影。写真撮影後、B区Ⅳ層掘削。
10.06　B区で土坑完掘後、実測図作成。B区Ⅳ層の掘削がほぼ終了。
10.07　B区散礫、中央トレンチ土層断面図作成。
10.08　A区埋め戻し開始。B区写真撮影。
10.09　B区Ⅴ層上面等高線図作成。B区埋め戻し開始。
10.10　埋め戻し終了。現場事務所撤去。調査終了。

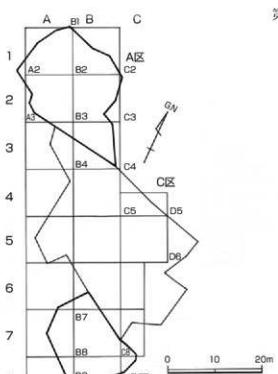
第3節　整理作業及び報告書作成

整理作業は、平成21年2月～11月に埋蔵文化財センター本館で実施した。

平成21年2月～4月に遺物の洗浄・注記を行った後、5月上旬に接合作業を開始した。その後5月下旬からは、陶磁器の遺物実測に入った。6月は縄文土器の実測と拓本製作、トレースを行った。7月は石器・金属製品・土製品の実測・トレース・拓本を主に行い、それと併行して遺構のトレース、図面レイアウト、文章作成を行った。遺物の写真撮影は、7～9月にかけて行った。



第4図　周辺地形図(S=1/2,000)



第5図　グリッド配置図(S=1/800)

点名	X 座 標	Y 座 標
A 2	-144893.5881	36115.7210
A 3	-144902.7432	36119.7439
B 1	-144880.4101	36120.8531
B 2	-144889.5652	36124.8761
B 3	-144898.7203	36128.8990
B 4	-144907.8754	36132.9220
B 7	-144935.3407	36144.9909
B 8	-144944.4958	36149.0138
B 9	-144949.0733	36151.0253
C 1	-144876.3861	36130.0078
C 2	-144885.5422	36134.0312
C 3	-144894.6973	36138.0541
C 4	-144903.8524	36142.0771
C 5	-144913.0075	36146.1001
C 7	-144931.3177	36154.1460
C 8	-144940.4728	36158.1689
D 5	-144908.9845	36155.2552
D 6	-144918.1396	36159.2781

第 1 表　　座標一覧表

第Ⅲ章　調査の記録

第１節　遺跡の層序

宮鶴第２遺跡の基本層序は第２・３表のとおりである。調査を実施したＡ・Ｃ区とＢ区では堆積層に違いが見られた。Ａ・Ｃ区では、大規模な宅地や農地の造成を行ってない調査区の北側にⅢ層（二次堆積アカホヤ火山灰層）の堆積が確認された。層厚は不規則で 10 ～ 25 ㎝で推移する。Ⅲ層直下は小礫、大礫を多量に含む地山層であるⅤ層となり、縄文時代早期の遺構・遺物の包含層であるⅣ層は存在しなかった。

Ｂ区は宅地造成を行った北西部分と水田として利用されていた北東部分を除く、調査区南部に縄文時代早期の遺構・遺物の包含層であるⅣ層の堆積が確認された。Ⅳ層直下のⅤ層上面の等高線を見ると標高 47.2 ～ 47.6 ｍの範囲に緩やかな傾斜の存在が確認でき、Ⅳ層もこの部分を中心に広がる。堆積状況は、中央部分が厚く約 80 ㎝に達し、谷部に向かって徐々に薄くなり、レンズ状を呈す。

なお、Ⅲ層はⅣ層よりも低い調査区中央部のⅤ層直上にわずかに堆積していた。また、Ⅱ層は平面上ではⅣ層の北側に並行する状態で確認された。これらは、宮鶴第２遺跡が広渡川に面した緩やかな傾斜地に立地していることから、大雨等による浸食、崩壊、堆積の影響を受けた結果と考えられる。

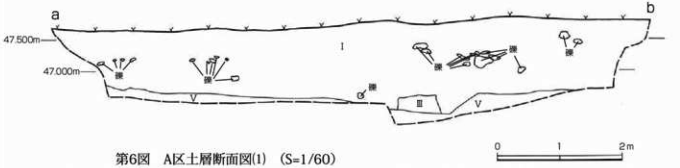
また、Ａ・Ｂ両調査区とも近現代に宅地や農地への改変を行った土地であったため、Ⅰ層に複雑に堆積が見られた。

第２表　基本層序（Ａ・Ｃ区）

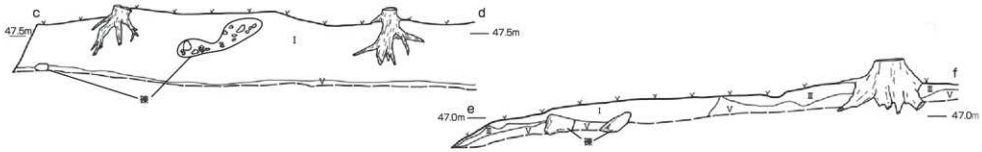
層No.	層　名	特　　徴
Ⅰ	表土	現在の耕作土および宅地造成に伴う客土。
Ⅱ	アカホヤ混褐色土層	7.5YR4/１灰褐色土。粘性は弱い。10 ～ 50 ㎜台のアカホヤブロックを多量に含む。
Ⅲ	二次堆積アカホヤ火山灰層	7.5YR7/8 黄橙色土。粘性はない。しまりはややある。アカホヤ火山灰の二次的堆積物。
Ⅴ	明黄褐色土層	2.5Y7/6 明黄褐色土。硬質。小礫（5 ～ 30 ㎜）・大礫（30 ㎜以上）を多量に含む。地山層。

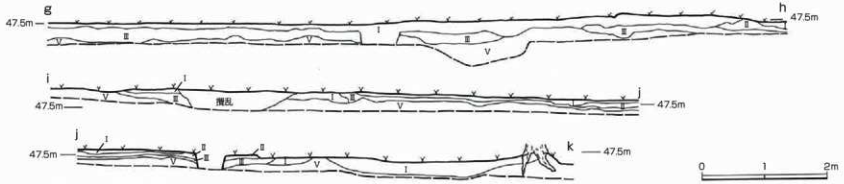
第３表　基本層序（Ｂ区）

層No.	層　名	特　　徴
Ⅰ	表土	現在の耕作土および宅地造成に伴う客土。
Ⅱａ	アカホヤ混褐色土層	10YR4/2 灰黄褐色土。粘性は弱い。10 ～ 30 ㎜台のアカホヤブロックと小礫（5 ～ 30 ㎜）を多く含む。
Ⅱｂ		2.5YR5/2 暗灰黄褐色土。粘性は弱い。10 ～ 30 ㎜台のアカホヤブロックと小礫（5 ～ 30 ㎜）を多く含む。
Ⅲ	二次堆積アカホヤ火山灰層	10YR6/6 明黄橙色土。粘性はない。アカホヤ火山灰の二次的堆積物。
Ⅳａ	黒褐色土層	10YR3/2 黒褐色土。粘性は強い。しまりがある。少量の 10YR6/4 にぶい黄橙色土と多量の小礫（3 ～ 30 ㎜）を含む。
Ⅳｂ		10YR2/2 黒褐色土。やや粘性あり。しまりはない。小礫(3 ～ 30 ㎜)を多量に含む。
Ⅴ	淡黄色土層	2.5YR8/4 淡黄色土。硬質。小礫（5 ～ 30 ㎜）・大礫（30 ㎜以上）を多量に含む。地山層。

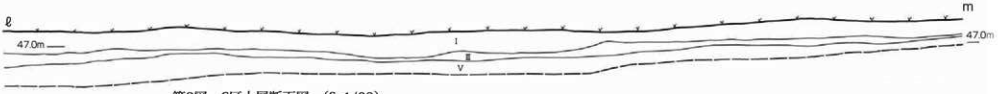


第6図　A区土層断面図(1)　(S=1/60)

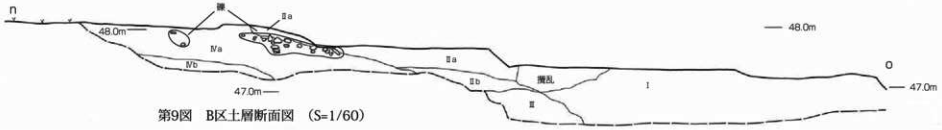




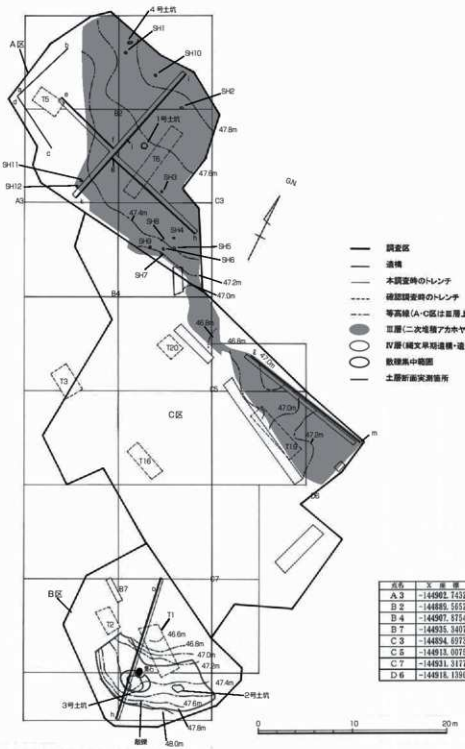
第7図　A区土層断面図(2)　(S=1/60)



第8図　C区土層断面図　(S=1/60)



第9図　B区土層断面図　(S=1/60)



名称	X座標	Y座標
A 3	-144902.7432	36119.7439
B 2	-144889.5052	36124.8761
B 4	-144907.9754	36132.9220
B 7	-144935.3407	36144.9909
C 3	-144894.6973	36128.0041
C 5	-144913.0075	36146.1001
C 7	-144931.3177	36154.1460
D 6	-144918.1396	36150.2781

第10図　全体遺構分布図(S=1/400)

第２節　旧石器時代の遺物

１　調査の概要

調査ではＡ、Ｂ両調査区にトレンチを設定（第10図）し、土層を観察したが旧石器時代の包含層は存在しなかった。そこでＡ区ではⅢ層（二次堆積アカホヤ）下面、Ｂ区ではⅣａ層、Ⅳｂ層（黒褐色土）を掘り下げたが、礫群などの遺構は確認できなかった。

２　遺物（第11図　６～７）

出土した遺物は２点である。１点（６）はＢ区の表土から、もう１点（７）はＡ区のⅢ層最下面から出土した。調査区が緩やかな傾斜地であることから、両者とも流れ込みの可能性が高い。

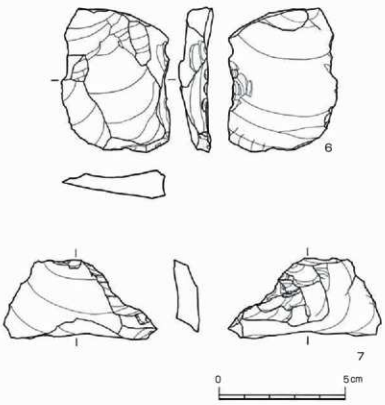
６は流紋岩の二次加工剥片である。外面に風化による灰黄色の斑紋や流紋が観察され、微細な剥離が施される。また打面も欠損している。７は珪質頁岩の二次加工剥片である。灰色を呈し、風化面は少ない。腹面に二次加工を施している。

第３節　縄文時代の遺構と遺物

１　調査の概要

確認調査の結果からＢ区の南側に縄文時代早期の包含層の存在が確認できた。そこでＢ区では表土を重機で剥いだ後、Ⅳ層上面を掘り下げて遺構検出を行ったところ、包含層から多量の礫を検出した（第12図）。今回の調査では、半径約２ｍの範囲で周辺より密に集まっている部分（第13図中のラインで囲まれた部分）を「集石遺構」と認定し、その周辺のやや粗の部分を「散礫」とした。その他、２基の土坑を検出している。また、遺物は土器と石器が出土している。

Ａ区には、縄文時代の包含層が存在しなかったため、Ⅲ層上面で遺構確認の後、Ⅲ層の掘り下げを行った。その結果、土坑１基を検出した。礫の出土も少なく（第12図）、土器の出土もなかったが、製品を含む石器が数点出土した（第16図）。



第11図　旧石器時代遺物実測図(S=2/3)

第12図　散礫分布図(S=1/600)

2　遺構

（1）1号集石遺構・散礫（第13図）

縄文時代早期のB区の旧地形は、南から北に向かって下っている。等高線を観察すると標高47.2～47.6 mにかけて幅の広がる部分があり、1号集石遺構と散礫の集中部分もこの範囲に位置する（第12図参照）。

1号集石遺構は原型をとどめず、北側谷部に落ち込むような形で検出された。検出部分が傾斜地であったため、風雨等の自然環境の影響を強く受けたと考えられる。敷石や掘り込みは確認できなかった。集石遺構、散礫を構成する礫のほとんどは砂岩で、遺跡の近くを流れる広渡川の河原で今日でも見ることができるものである。

（2）土坑（第14図）

〔1号土坑〕

1号土坑は、A区の中央部付近で検出された。Ⅴ層（地山層）に掘り込まれ、平面形態は直径約80 ㎝の円形を呈す。埋土は二次堆積アカホヤで礫や炭化物、遺物等の出土はなかった。壁面・床面に赤化箇所は見られなかった。

〔2号土坑〕

2号土坑は、B区の南西部で長軸が等高線に平行する形で検出された。平面形態は長軸約143 ㎝、短軸約80 ㎝の楕円形で、床の中央部分がやや盛り上がる断面形態を呈す。埋土はやや粘質の黒褐色土で礫や炭化物、遺物等の出土はなかった。また、壁面・床面に赤化箇所は見られなかった。

〔3号土坑〕

3号土坑は、B区の散礫集中部分から長軸が等高線に平行する形で検出された。平面形態は長軸約220 ㎝、短軸約197 ㎝の楕円形で、2号土坑同様に床の中央部分がやや盛り上がる断面形態を呈す。埋土はやや粘質の黒褐色土で礫や炭化物、遺物等の出土はなかった。また、壁面・床面に赤化箇所は見られなかった。

3　遺物

縄文時代の遺物はB区の1号集石遺構と散礫集中部分及び包含層（Ⅳa・Ⅳb層）から早期の土器が出土している（第15図）。石器は、B区包含層から蔵石等が出土したほか、A・B両区のⅠ層からⅢ層にかけて石斧や石匙・石錐・黒曜石の剥片が出土した（第16図）。

（1）1号遺構に伴う遺物（第17図）

遺構に伴う遺物は8～14である。1号集石遺構から出土し、縄文時代早期の土器で、器種は深鉢である。

8は口縁から胴部にかけて、9・10・13は胴部に貝殻条痕文が密に施されている。11・12・14は胴部に前者よりも粗い貝殻条痕文が施されている。内面調整は、8～12がナデ、13・14はケズリである。

（2）包含層中の遺物

土器（第18～19図）

出土した土器の器種はいずれも深鉢で、貝殻で施文されたものが大半を占める。これらを文様を主軸にして下記のように分類して説明する（遺構に伴う遺物も含む）。

Ⅰ類　貝殻条痕文を施したもの

（1）口縁部

A　口縁部上位に押圧刻みを施し、横方向の条痕文を施すもの（15、16）。

a　15は口縁部に工具による縦方向の刻み、その下位に棒状工具による沈線文と強い条痕文を施す。

b　16は口縁部に工具による短い縦方向の刻みが施されている。

B　口縁部上位に貝殻腹縁による刺突文線、口縁部から胴部にかけて斜め方向の条痕文を施したもの（17）。

17は口縁部上位から条痕文が右上から左下、左上から右下に交互に施されているため、胴部上位で条痕文が交差する部分が見られる。口縁部上位の貝殻刺突文は条痕文を施した後に施文した痕が窺える。

C　斜め方向の条痕文のみが施されたもの（8、18～22）。

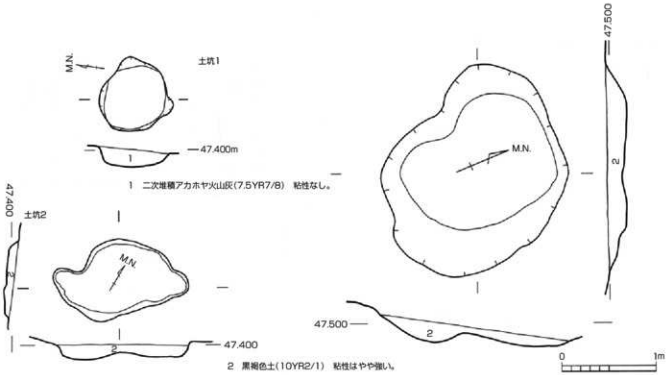
a　口唇部が丸みをおびるもの。

18はやや外反する口縁部をもつ。

b　口唇部に平坦面をもつもの。

19は口縁部が若干屈曲する形状を呈す。集石遺構内から出土した9と同一個体と考えられる。20・21はやや外反する口縁部をもち、22は直線的に伸びる口縁部をもつ。

第13図　1号集石遺構・散礫実測図　(1/20)



第14図　土坑(縄文時代)実測図　(S=1/40)

第４表　土坑（縄文時代）観察表

遺構	出土位置	検出面	検出面規模〔m〕			等高線との位置	平面形態	備考
	〔区〕	〔層〕	長軸	×短軸	×深さ			
１号土坑	Ｂ－２	Ⅴ	0.80	× 0.80	× 0.2	直交	円	
２号土坑	Ｂ－８	Ⅳ－ｂ	1.43	× 0.80	× 0.1	平行	楕円	中央部がやや浅くなる。
３号土坑	Ｂ－８	Ⅳ－ｂ	2.20	× 1.97	× 0.2	平行	楕円	中央部がやや浅くなる。

第15図　縄文土器(早期)分布図　(S=1/200)

D　横方向の条痕文を施したもの（23～25）。

a　口縁部が外反するもの。

23は口縁部が外反し、丸みを帯びた口唇部をもつ。

b　口縁部が直線的に伸びるもの。

24は口径の小さい器形を呈す。24、25ともに丸みを帯びた口唇部をもつ。

（2）胴部

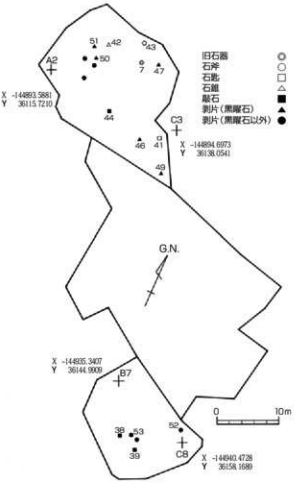
A　斜め方向の条痕文を施したもの（9～14、26～28）。

9、10、13、26は細く強い条痕文が密に施されている。

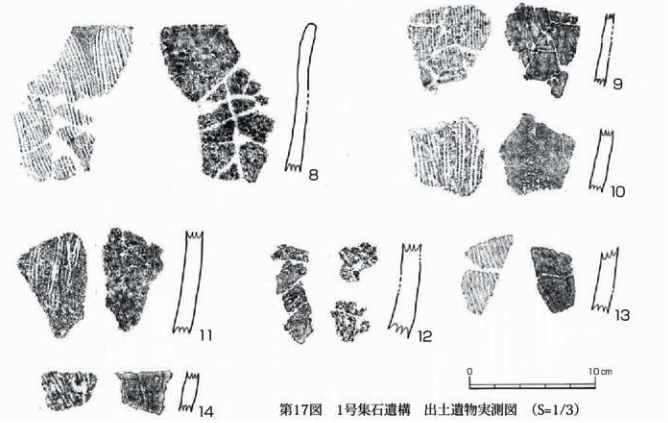
一方、11、12、14、27、28には、前者と比較するとやや密度の粗い条痕文が施されている。

B　横方向の条痕文を施したもの（29）。

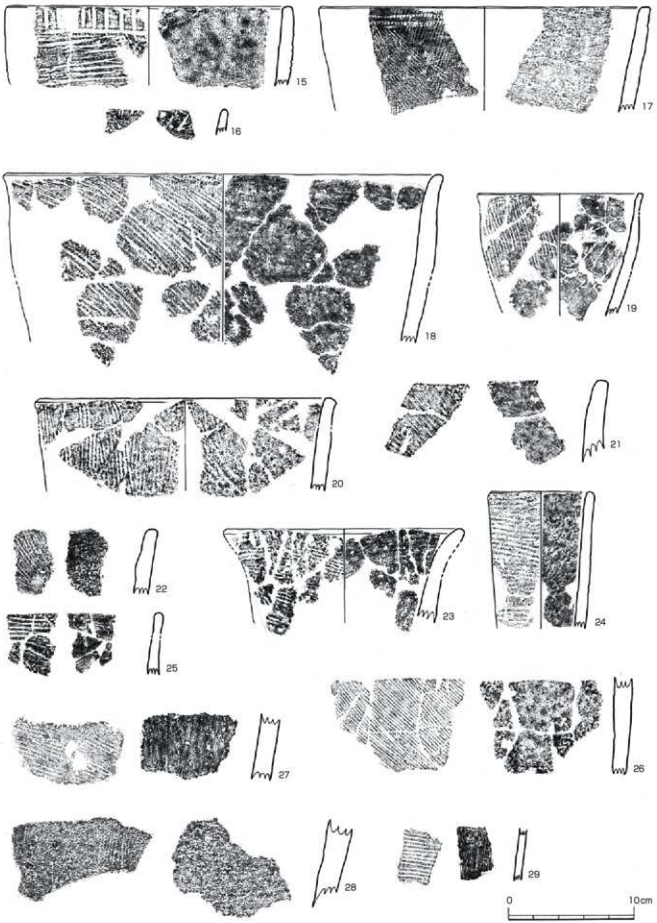
29は外面に強い条痕文、内面にケズリ調整が施されている。



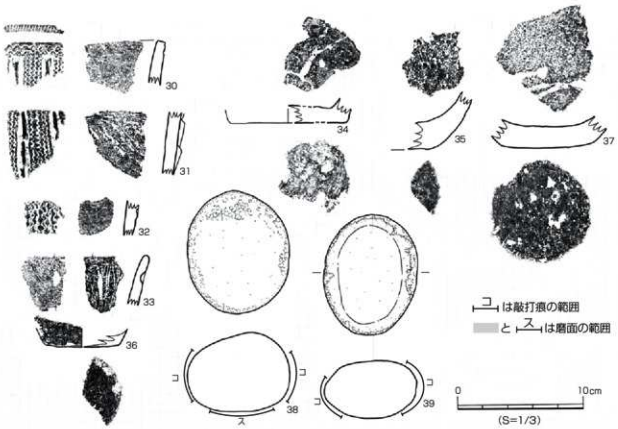
第16図　旧石器・石器（縄文時代）分布図　（S=1/600）



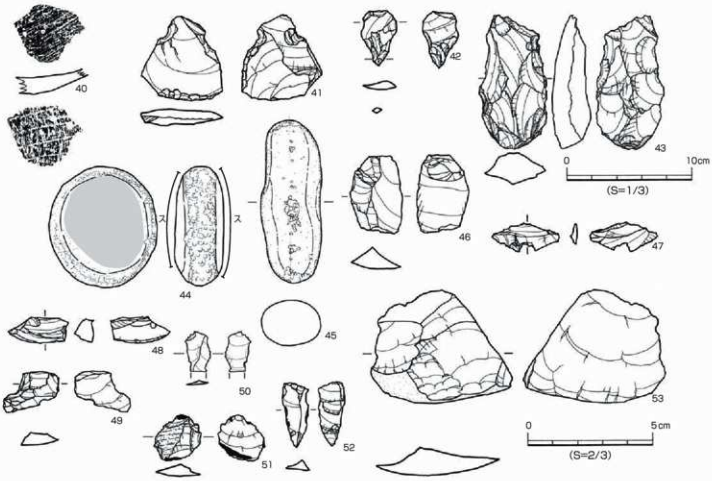
第17図　1号集石遺構　出土遺物実測図　（S=1/3）



第18図包含層出土遺物実測図(1)(S=1/3)



第19図　包含層出土遺物実測図(2)　(S=1/3)



第20図　包含層以外の出土遺物(縄文時代)実測図　(40,43～45…S=1/3　41,42,46～53…S=2/3)

Ⅱ類　貝殻腹縁刺突文を施したもの

（1）口縁部

A　楔形突帯をもつもの（30）。

30は口縁端部にヘラ状工具で押圧刻み、口縁部に横方向の貝殻腹縁刺突文、その下に楔形突帯と縦方向の貝殻腹縁刺突文が施されている。

（2）胴部

A　楔形突帯をもつもの（31）。

31は縦方向の貝殻腹縁刺突文と楔形突帯が並行する形で施されている。

B　貝殻腹縁刺突文のみが施されたもの（32）。

32は縦方向の貝殻腹縁刺突文が施されている。

Ⅲ類　貝殻による施文のないもの

（1）口縁部（33）

33は外面の口縁上部に工具による刺突文が施されている。内面には圧痕が見られる。

・底部

A　外面全体が平坦なもの（34）。

B　外面の中央部が平坦で端部が丸みをおびるもの（35、36）。

C　外面全体が緩やかな曲面を呈するもの（37）。

石器（第19図　38～39）

38、39は敲石で、石材は砂岩である。ともに側面に敲打痕を有する。また38の平坦面には磨面があることから、磨石としても使用されていたことが考えられる。

（3）包含層以外の遺物

土器（第20図　40）

40はB区の表土から出土したもので、外面に明瞭な組織痕を有す、縄文時代晩期の深鉢の底部である。

石器（第20図　41～53）

41は石匙で、石材はチャートである。42は石錐である。先端部が厚く、えぐれた部分を有す。錐の部分は欠損している。石材はホルンフェルスである。43は石斧である。石材は頁岩で加工途上の未製品である。44・45は敲石で、石材はともに砂岩である。44は側面に敲打痕を有す。また平坦面に磨面があることから、磨石としても使用されていたことが考えられる。45は両端と中央部に敲打痕を有す。

46～53は剥片である。46～51は黒曜石を石材とし、48・50・51以外はⅢ層（二次堆積アカホヤ層）から出土した。46は濁りがあり、白色の粒子が混入している。霧島産と考えられる。47は漆黒色で良質であることから腰岳産の可能性が考えられる。48は姫島産である。49～51は透過性のない特徴をもつ上牛鼻産のものである。

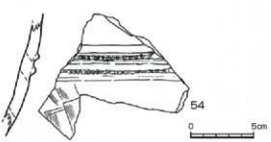
52は二次加工剥片で、石材はチャートである。53は尾鈴山酸性岩類の溶結凝灰岩が石材として用いられている。2点ともB区Ⅱa層（アカホヤ混褐色土層）から出土したものである。

第4節　弥生時代の遺物

土器（第21図　54）

今回の調査では包含層が縄文時代早期のみであったため、弥生時代の遺構の検出はなく、遺物も表土から土器が1点出土したにとどまった。

54は下城系の甕で2条の連続した刻目を施した貼付け突帯をもつ。外面にはナデ、横ナデ、ハケメの調整が見られる。弥生時代中期の初頭から前半のものと考えられる。



第21図　遺物(弥生時代)実測図　(S=1/3)

第５表　土器観察表

No	器種	部位	出土地点	法量（cm）	手法・調整・文様		色調		胎土の特徴	備考
					外面	内面	外面	内面		
1	深鉢（縄文早期）	口縁部～胴部	覆土T2	口径（27.8）	口縁端部にナデの後、ヘラ状工具による連続刻み。口縁上部から下部に棒状工具による沈線。胴部に縦方向の燃糸文。	ケズリ	橙（7.5YR7/6）	橙（7.5YR6/6）	2㎜以下の黒色光沢粒、1㎜以下の乳白色粒を多く含む	隆ノ神式
2	深鉢（縄文早期）	胴部	覆土T8		貝殻腹縁による縦方向の刺突文	ナデ	橙（5YR6/8）	橙（5YR6/8）	2㎜以下の褐色光沢粒・乳白色粒、3㎜以下の黒色光沢粒を多く含む。	
3	深鉢（縄文早期）	底部	覆土T2	底径（10.6）	縦方向の燃糸文の後、棒状工具による沈線文。	ナデ	にぶい黄橙（10YR6/3）	にぶい黄橙（10YR7/3）	3㎜以下の赤褐色粒、1㎜以下の乳白色粒を少量含む。	隆ノ神式
8	深鉢（縄文早期）	口縁部～胴部	B区集石		斜め方向の貝殻条痕文	ナデ	黒褐（10YR3/1）	浅黄橙（7.5YR8/6）	3㎜以下の乳白粒を多く含む。2㎜以下の光沢粒を少量含む。	
9	深鉢（縄文早期）	胴部	B区集石		斜め方向の貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙（10YR7/4）	にぶい褐色（10YR6/3）	微細な反白色・黒色・透明光沢粒を少量含む。	外面の一部に黒斑あり。
10	深鉢（縄文早期）	胴部	B区集石		斜め方向の貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙（10YR6/4）	にぶい褐（7.5YR7/4）	2㎜以下の乳白粒、透明粒をわずかに含む。1㎜以下の黒色粒を少量含む。	
11	深鉢（縄文早期）	胴部	B区集石		斜め方向の貝殻条痕文、一部ナデ	ナデ	橙（7.5YR7/6）	褐灰（7.5YR4/1）	3㎜以下の乳白粒、2㎜以下の黒褐色光沢粒を多く含む。	外面の風化が著しい。
12	深鉢（縄文早期）	胴部	B区集石		斜め方向の貝殻条痕文	ナデ	にぶい褐色（10YR5/3）	明褐灰（7.5YR7/1）	1㎜以下の浅黄橙色粒を多く含む。1㎜以下の透明光沢粒を少量含む。	内外面とも風化が著しい。
13	深鉢（縄文早期）	胴部	B区集石		斜め方向の貝殻条痕文	ケズリ	黄橙（10YR6/6）	黄褐（10YR3/1）	3㎜以下の乳白粒粒を多く含む。2㎜以下の褐色粒を少量含む。	内面の一部に黒斑あり。
14	深鉢（縄文早期）	胴部	B区集石		斜め方向の貝殻条痕文	ケズリ	にぶい黄橙（5YR7/4）	にぶい褐（7.5YR6/3）	微細な浅黄橙・黒色・透明光沢粒を少量含む。	外面の風化が著しい。
15	深鉢（縄文早期）	口縁部～胴部	B-7	口径（21.4）	口縁部に工具による縦方向刻み、その下部に棒状工具による沈線文。胴部に横方向の貝殻条痕文。	ナデ	にぶい黄橙（10YR6/3）	にぶい黄橙（7.5YR7/4）	2㎜以下の黒色粒、1㎜以下の透明粒を少量含む。1㎜以下の乳白粒粒をわずかに含む。	
16	深鉢（縄文早期）	口縁部	B-7		口縁部に工具による縦方向の刻み、その下位に横方向の貝殻条痕文	ナデ	明褐（7.5YR5/8）	橙（7.5YR6/8）	2㎜以下の褐色・反白色粒を多く含む。	
17	深鉢（縄文早期）	口縁部～胴部	B-7	口径（25.2）	口縁端部にヘラ状工具による刻み。口縁上部は貝殻条痕文の後ナデ、その下に貝殻腹縁による縦方向の2条の連続刺突文。胴部に縦・斜め方向の貝殻条痕文。	ナデ	明赤褐（2.5YR5/6）	橙（2.5YR6/6）	3㎜以下の乳白粒粒、2㎜以下の光沢粒を多く含む。	外面胴部風化気味、スス付着。
18	深鉢（縄文早期）	口縁部	B-7	口径（35.0）	斜方向の貝殻条痕文	ナデ	暗赤灰（2.5YR3/1）	橙（5YR7/8）	4㎜以下の反白粒、2㎜台の黒褐色光沢粒、1ミリ以下の褐色粒を多く含む。	口縁部にススが付着。
19	深鉢（縄文早期）	口縁部～胴部	B-7	口径（12.5）	口縁部から胴部上位に斜め方向の貝殻条痕文。	ナデ	明黄褐（10YR7/6）	にぶい橙（7.5YR 7 /4）	2㎜以下の乳白粒粒を少量含む。	外面の口縁部に黒斑あり、一部にススが付着。胴部は風化が著しい。9と同一個体。
20	深鉢（縄文早期）	口縁部～胴部	B-7	口径（23.2）	斜め方向の貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙（10YR7/4）	にぶい橙（7.5YR7/4）	3㎜以下の乳白粒粒を多く含む。5㎜以下の明赤褐色粒と2㎜以下の光沢粒を少量含む。	外面に黒斑あり。
21	深鉢（縄文早期）	口縁部	B-7		斜め方向の貝殻条痕文	ナデ	橙（7.5YR7/6）	にぶい黄橙（2.5YR7/4）	3㎜以下の乳白粒粒を多く含む。微細な透明粒を少量含む。	
22	深鉢（縄文早期）	口縁部	B-7		斜め方向の貝殻条痕文	ナデ	橙（2.5YR6/6）	褐灰（5YR6/1）	3㎜以下の乳白粒粒を多く含む。2㎜以下の褐色粒を少量含む。	
23	深鉢（縄文早期）	口縁部～胴部	B-7	口径（20.7）	横方向の貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙（10YR6/3）	灰黄褐（10YR6/2）	微細な反白色・橙色粒を多く含む。微細な透明粒を少量含む。	
24	深鉢（縄文早期）	口縁部～胴部	B-7	口径（8.0）	横方向の貝殻条痕文	ナデ	橙（7.5YR6/6）	橙（5YR7/8）	2㎜以下の乳白粒粒を多く含む。3ミリ以下の白色・透明粒を少量含む。	内面・外面に黒斑あり。
25	深鉢（縄文早期）	口縁部	B-7		斜め方向の貝殻条痕文	ナデ	橙（5YR6/6）	橙（5YR7/6）	2㎜以下の乳白粒を多く含む。	
26	深鉢（縄文早期）	胴部	B-7		斜め方向の貝殻条痕文	ナデ	明黄褐（10YR7/6）	橙（7.5YR7/6）	微細な黒色・橙色粒を多く含む。微細な反白色・透明粒を少量含む。	
27	深鉢（縄文早期）	胴部	B-7		斜め方向の貝殻条痕文	ナデ	橙（7.5YR6/6）	橙（2.5YR6/8）	2㎜以下の白色・透明粒と微細な光沢粒を少量含む。微細な黒色光沢粒をわずかに含む。	
28	深鉢（縄文早期）	胴部	B-7		斜め方向の貝殻条痕文	ナデ	明赤褐（5YR5/6）	黒褐（5YR3/1）	5㎜以下の乳白粒粒を多く含む。微細な黒色光沢粒を少量含む。	
29	深鉢（縄文早期）	胴部	B-7		横方向の貝殻条痕文	ケズリ	橙（5YR6/6）	にぶい赤褐（5YR5/4）	1㎜以下の浅黄色粒を多く含む。微細な透明粒を少量含む。	内面の一部にススが付着。

No.	器種	部位	出土地点	法量（cm）	手法・調整・文様		色調		胎土の特徴	備考
					外面	内面	外面	内面		
30	深鉢（縄文早期）	口縁部	B-7		口縁端部にヘラ状工具による連続する押圧刻み。口縁部に縦方向の貝殻腹縁刺突文。その下部に横形突帯と縦方向の貝殻腹縁刺突文。	ナデ	反暗褐（7.5YR4/2）	明赤褐（2.5YR5/6）	微細な反白色・黒色・透明粒を多く含む。	知覧式
31	深鉢（縄文早期）	胴部	B-7		横形突帯と縦方向の貝殻腹縁刺突文。	ナデ	に.ぶい赤褐（5YR4/4）	橙（5YR6/6）	微細な反白色・黒色・透明粒を多く含む。2㎜以下の浅黄橙粒を少量含む。	知覧式
32	深鉢（縄文早期）	胴部	B-7		縦方向の貝殻腹縁刺突文。	ナデ	に.ぶい褐（7.5YR5/4）	に.ぶい褐（7.5YR5/3）	微細な反白色・浅黄橙色・金色光沢粒を多く含む。	
33	深鉢（縄文早期）	口縁部	B-7		ナデ、工具による刺突文	ナデ	黒褐（7.5YR3/2）	黒褐（7.5YR3/2）	2㎜以下の乳白色粒を多く含む。2㎜以下の透明粒、微細な褐色粒や光沢粒をわずかに含む。	内面に圧痕あり。
34	深鉢（縄文早期）	底部	B-7	底径（9.0）	ナデ	ナデ	灰黄褐（10YR6/2）	に.ぶい褐（7.5YR5/3）	1㎜以下の灰白色・橙色・褐色・透明粒を多く含む。2㎜台の灰白色粒をわずかに含む。	内面・外面とも風化が著しい。
35	深鉢（縄文早期）	底部	B-7		ナデ	ナデ	浅黄橙（10YR8/3）	灰褐（7.5YR5/2）	1㎜台の灰白色・赤褐色粒、1㎜以下の黒色・灰白・浅黄橙色・透明粒を多く含む。	
36	深鉢（縄文早期）	底部	B-7		ナデ	ナデ	浅黄橙（10YR8/3）		1.5㎜以下の灰白色・褐色・黒色粒を多く含む。	内面は剥離により欠損。
37	深鉢（縄文早期）	底部	B-7		ナデ	ナデ	灰黄（2.5YR6/2）	に.ぶい黄橙（10YR7/3）	1㎜以下の灰白色・明褐色・透明粒を多く含む。2㎜台の褐色・明赤褐色粒を少量含む。	外面に圧痕あり。
40	深鉢（縄文晩期）	底部	B区		組織痕	ナデ	に.ぶい橙（7.5YR7/4）	に.ぶい黄橙（10YR6/3）	1㎜以下の黒色・灰白色粒を多く含む。	
54	壁（弥生土器）	胴部	A区		貼付け刻み目突帯、ナデ、横ナデ、ハケメ	ナデ	に.ぶい橙（7.5YR6/4）	橙（7.5YR6/6）	1㎜以下の浅黄橙色・黒色・灰白色粒を多く含む。1㎜台の灰白色粒をわずかに含む。	

第6表　石器観察表

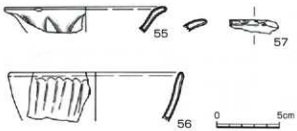
No.	器種	石材	出土地点	計測値				備考
				最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	
4	剥片	珪質頁岩	確認調査T2	2.4	2.4	0.9	2.5	旧石器の可能性有り
5	剥片	珪質頁岩	確認調査T3	2.5	1.6	0.4	1.3	旧石器の可能性有り
6	剥片	珪質頁岩	B区	5.7	4.3	1.1	31.1	旧石器
7	剥片	珪質頁岩	B-1	3.2	6.1	1.8	19.7	旧石器
38	敲石	砂岩	B-7	9.9	8.2	6.4	723.4	
39	敲石	砂岩	B-8	9.7	7.6	4.6	456.9	
41	石匙	チャート	B-3	3.4	3.2	0.7	7.0	
42	石鏃	黒曜石	A-1	2.2	1.5	0.5	1.2	
43	石斧	黒曜石	B-1	10.6	5.4	3.1	172.2	未製品
44	剥片	砂岩	A-2	9.6	8.7	3.9	501.8	
45	剥片	砂岩	B区	13.1	4.8	3.7	325.5	
46	剥片	黒曜石	B-3	3.1	2.1	1.0	5.3	産地不明、霧島産か?
47	剥片	黒曜石	B-1	1.2	2.8	0.3	0.5	腰岳産
48	剥片	黒曜石	A-2	1.1	2.4	0.9	1.9	姫島産
49	剥片	黒曜石	B-3	1.7	2.3	0.6	1.7	上牟礼産
50	剥片	黒曜石	A-1	1.6	1.0	0.2	0.2	上牟礼産
51	剥片	黒曜石	A-1	1.9	2.0	0.5	1.8	上牟礼産
52	剥片	チャート	B-7	2.6	1.1	0.5	1.1	
53	剥片	溶結凝灰岩	B-7	4.6	5.7	1.1	26.3	尾鈴山産

第５節　中世の遺物

陶磁器（第22図　55～57）

中世の遺物はＢ区から３点出土した。２点（56・57）は表採、１点（55）はⅡ層から出土した。３点とも中国龍泉窯の青磁である。

55は杯で口縁部が外反する。外面に鎬蓮弁文がある。14世紀後半から15世紀頃のものと考えられる。56は碗である。外面に細線による蓮弁文がある。表面に熱を受けた際に生じた気泡が見られる。15世紀後半から16世紀頃のものと考えられる。57は稜花皿である。15世紀から16世紀のもと考えられる。



第22図　遺物(中世)実測図　(S=1/3)

第６節　近世以降の遺構と遺物

１　調査の概要

重機による表土剥ぎの後、遺構検出を行ったところＡ区のⅢ層（二次堆積アカホヤ層）上面で１基の土坑（４号土坑）とⅢ層に掘り込まれた12基のピット（ＳＨ１～12）が検出された（第23図）。時代を特定する遺物の出土はなかったが、埋土の少量のアカホヤブロックと浅黄色粒を含んだ黒褐色土と少量のアカホヤブロックと黒褐色土を含んだ灰白色粘土がピット周辺トレンチのⅠ層中に確認できたことから近世以降の比較的新しい時期のものと判断した。

また、検出したピットの平面配列を観察したが、掘立柱建物の配列は確認されなかった。

２　遺構

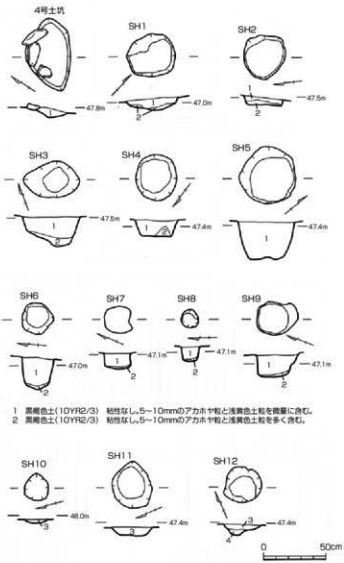
（１）土坑

〔４号土坑〕（第23図）

４号土坑は、Ａ区の北側で検出し、等高線に直交する。上部は削平されており、平面形態は長軸55㎝×短軸35㎝の楕円形で、深さ８㎝である。埋土は５～10㎜のアカホヤブロックと浅黄色粒を含んだ黒褐色土で、床面から12～24㎝大の礫が３個出土した。

（２）ピット（第23図）

12基のピットの埋土を観察したところＳＨ１～９は少量の５～10㎜のアカホヤブロックと浅黄色粒を含んだ黒褐色土、ＳＨ10～12は少量の５～10㎜のアカホヤブロックと黒褐色土を含んだ灰白色粘土であった。埋土が異なることから前者と後者とには時期差があると考えられる。平面形態はＳＨ１・３・９が楕円形で、それ以外は円形を呈す。ピットの直径は15㎝のものから45㎝ものまであり、一定していない。



第23図　土坑・ピット(近世以降)実測図　(S=1/30)

第7表　土坑・ピット（近世以降）観察表

遺構	出土位置	検出面	検出面規模〔m〕			等高線との位置	平面形態	備考
	〔区〕	〔層〕	長軸	×短軸	×深さ			
4号土坑	B－1	Ⅲ	0.58	×0.35	×0.08	直交	楕円	底面に礫3個。
SH1	B－1	Ⅲ	0.39	×0.33	×0.10		円	
SH2	B－1	Ⅲ	0.35	×0.33	×0.08		円	
SH3	B－2	Ⅲ	0.46	×0.29	×0.23	平行	楕円	
SH4	B－3	Ⅲ	0.37	×0.33	×0.14		円	
SH5	B－3	Ⅲ	0.45	×0.44	×0.30		円	
SH6	B－3	Ⅲ	0.26	×0.24	×0.25		円	
SH7	B－3	Ⅲ	0.21	×0.20	×0.12		円	
SH8	B－3	Ⅲ	0.15	×0.15	×0.12		円	
SH9	B－3	Ⅲ	0.32	×0.26	×0.18		楕円	
SH10	B－1	Ⅲ	0.21	×0.19	×0.03		円	
SH11	A－2	Ⅲ	0.38	×0.32	×0.07		楕円	
SH12	A－2	Ⅲ	0.29	×0.28	×0.09		円	

3　遺物

陶磁器

（1）肥前系の陶磁器

肥前系と考えられる磁器は本遺跡の出土遺物の中でも中心的な遺物で多数出土した。ここでは、器種別を中分類の基礎として記述する。

①**碗**（第24図　58～69）・・碗は器形でさらに細分する。

碗Ⅰ類

丸碗（58～60）：丸みをおびながら立ち上がる器形をもつ。58は外面に雪輪梅花文が描かれ、18世紀後半のものと考えられる。59はコンニャク印判による菊と斜格子文が見られる。18世紀前半のもとと考えられる。60は二重網目文が描かれており、18世紀後半のものと考えられる。

碗Ⅱ類

小丸碗（61・62）：丸碗と同じ特徴を持つが口径が小さい。61は青磁染付で見込部の二重圏線内にコンニャク印判で五弁花文が施されている。18世紀のものと考えられる。62は外面に矢羽根紋を施す。19世紀のものと考えられる。

碗Ⅲ類

朝顔形碗（63）：底部で大きく屈曲し、徐々に広がりながら直線的に立ち上がる器形をもつ。外面に青磁釉、内面見込部にコンニャク印判による五弁花文が見られる。18世紀後半のものと考えられる。

碗Ⅳ類

端反碗（64～66）：口縁部で丸みをおびながら立ち上がり、口縁端部付近で外反する器形をもつ。64は外面に山水楼閣文が描かれ、見込部に焼成の時に用いた三足付ハマの痕が見られる。18世紀後半のものと考えられる。65は外面にコウモリ、内面口縁部に四方襷文が描かれており、18世紀末～19世紀のものと考えられる。66は外面に型紙刷りによる文様と口縁端部に口紅装飾が施されている。明治期のものと考えられる。

碗Ⅴ類

小広東碗（67～69）：底部から口縁部にかけて直線的に開く器形をもつ。高台が高く径が大きい。67は高台から口縁に向かってねじ文が描かれ、68には「竜」の文字が見られる。18世紀後半のものと考えられる。69には剣先文が描かれており、18世紀末のものと考えられる。

②**皿、鉢、甕、仏飯器、小杯、蓋**（第24図70～79）

70～73は皿である。70には胎土目積み痕

第24図　遺物(近世以降)実測図(1)(S=1/3)

が見られ、16 世紀末から 17 世紀前半のものと考えられる。71 には花弁文が描かれている。18 世紀後半から 19 世紀前半のものと考えられる。72･73 は口縁部に口紅が施された輪花皿で、18 世紀後半から 19 世紀前半のものと考えられる。72 は無文の白磁調で蛇ノ目凹形高台をもつ。73 には山水楼閣文が描かれている。

74 は八角鉢である。墨弾きによる文様が描かれ、焼接ぎによる修復の痕も見られる。19 世紀のものと考えられる。75 は口縁部が内側と外側に L 字状に張り出した甕である。外面に明褐色の鉄釉が施されている。76 は赤絵の施された仏飯器で 18 世紀後半から 19 世紀のものと考えられる。77 は小杯でイッチンによる草花文が施されている。18 世紀末から 19 世紀のものと考えられる。78 は青緑釉が施された土瓶の蓋で 18 世紀後半から 19 世紀のものと考えられる。79 は広東碗の蓋である。黒味の強い呉須で草・昆虫が描かれている。

（2）その他の産地の陶磁器（第24～25図 80～93）

80 は明赤褐色の胎土の琉球の荒焼の壺である。18 世紀後半のものと考えられる。

81、82 は薩摩系の陶器である。81 は蓋で 18 世紀後半のものと考えられる。82 は民俗例で「山茶花」と呼ばれる土鍋である。大型で口がほぼ直立で立ち上がる。外面には鉄釉が施されている。

83 は渦巻高台をもつ萩焼の碗である。藁灰釉と鉄釉の流しがけが施されている。19 世紀のものと考えられる。

84 ～ 86 は備前系の擂鉢である。84 は放射状に広がる 7 条 1 単位の擂目をもつ。口縁部は上部を立ち上げ、三角形の断面を呈する。17 世紀後半のものと考えられる。85 も放射状にひろがる 6 条 1 単位の擂目をもつ。84 と比較すると口縁下部が薄く、先端部まで垂直に立ち上がる形状を呈す。18 世紀初頭のものと考えられる。86 は底部で放射状の擂目をもつ。17 世紀後半のものと考えられる。

87 は段重の蓋、88 は小丸碗である。88 は断面が方形を呈する高台をもち、内外面に陥入が見られる。共に 18 世紀後半以降の関西系のものであると考えられる。

89、90 は瀬戸・美濃系と考えられる陶磁器である。89 は大皿で内面に呉須と鉄釉による流し掛けが見られる。90 は端反碗で外面に「寿」の文字と松が描かれている。19 世紀のものと考えられる。

91 は信楽系の杉形碗（小杉茶碗）である。外面に若杉文が描かれ、18 世紀後半のものと考えられる。92 は灰釉を施した片口である。産地は不明だが、19 世紀のものと考えられる。93 は尻繋である。馬具の一種で革紐等を用いて胸の前から鞍に連結させて、鞍擦れを防止するために用いられたものである。

（3）銭貨・金属製品（第 25 図 94 ～ 96）

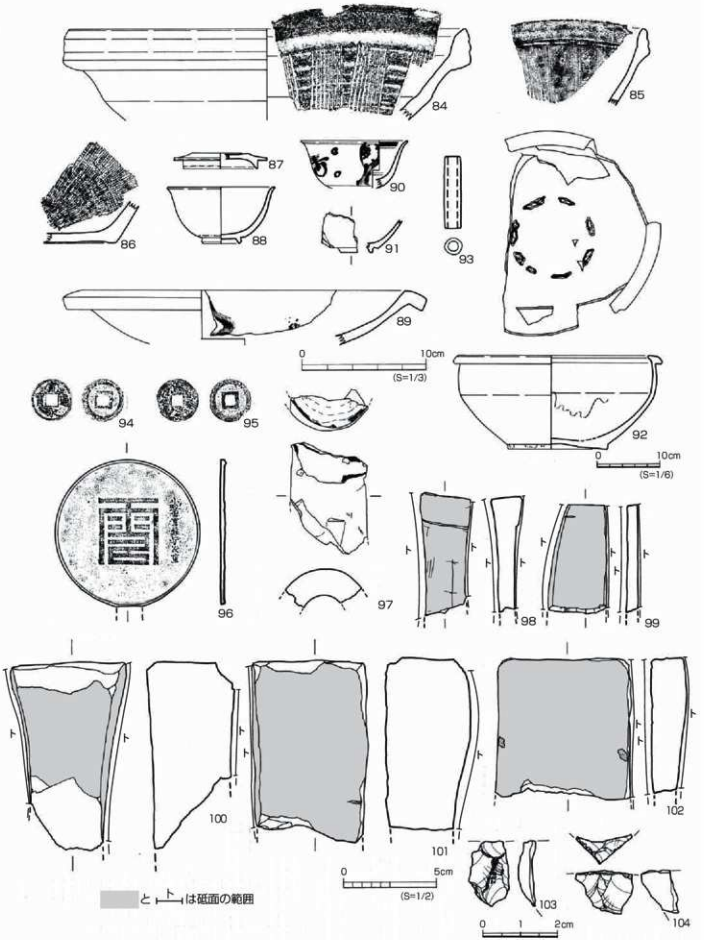
94・95 は寛永通宝（新寛永）である。96 は柄鏡である。柄の部分が欠損しており、「小橋豊後守友重」の銘を有す。

（4）土製品・石製品（第 25 図 97 ～ 104）

97 は鞴の羽口である。心棒に粘土を巻き付けて成形したもので、外面に鉱滓やガラス質の不純物が付着している。

98 ～ 102 は砥石である。いずれも下端部が欠損しているが、よく研ぎこまれている。石材は 98 が頁岩、99 ～ 102 が凝灰岩である。99 には熱を受けた痕が見られる。100、101 は赤褐色の鉱物粒、102 は暗緑灰色の鉱物粒を含む。

103、104 は火打石の破片で、石材は玉髄である。103 は本来鋭かった稜線が、丸くなるように面的に潰れている。火打金と打ち付けた時あるいは火打石の角（稜線）を再生する時に生じたと考えられる。104 は稜線が弱く潰れている。火打金と打ち付けた時か火打石の角を再生するときに生じたものと考えられる。



第25図　遺物(近世以降)実測図(2)　84～91・93・97(S=1/3),92(S=1/6),94～96・98～102(S=1/2),103・104(S=1/1)

第８表　中世以降陶磁器観察表

No.	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)	文様・調整の特徴	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	焼成	備考
55	青磁	杯	口縁	B-7	口径（13.0）	内外面施釉。圏線が文	釉調：オリーブ灰(10Y5/2)	胎土：灰白(7.5Y8/1)	精良	堅緻	龍泉窯。残存1/6。
56	青磁	碗	口縁	B区	口径（14.0）	内外面施釉。細線による蓮弁文	釉調：オリーブ灰(10YR6/2)	胎土：灰白(7.5Y7/1)	精良	堅緻	龍泉窯。内外面に小さな気泡が見られる。残存1/8。
57	青磁	皿	口縁	B区		内外面施釉	釉調：オリーブ灰(10Y5/2)	胎土：灰黄(2.5Y7/2)	精良	堅緻	龍泉窯。
58	磁器	碗（丸碗）	口縁～底部	A区	口径（9.6）底径 3.6 器高 5.1	内外面施釉。外面に雪輪梅花文	釉調：オリーブ灰(2.5GY6/1)	胎土：灰白(5Y7/1)	精良	堅緻	肥前系。残存1/3。
59	磁器	碗（丸碗）	口縁～胴部	A区	口径（9.6）	内外面施釉。外面にコンニャク印刷による草と鉄格子文。内面口縁部と見込部に圏線。	釉調：明緑灰(7.5GY8/1)	胎土：灰白(5Y8/1)	精良	堅緻	肥前系。残存1/4。
60	磁器	碗（丸碗）	胴部～底部	A区	底径（3.4）	内外面施釉。内外面に二重網目文。	釉調：明緑灰(7.5GY8/1)	胎土：灰白(2.5Y8/1)	精良	堅緻	肥前系。残存1/6。
61	磁器	碗（小丸碗）	口縁～底部	A区	口径（7.2）底径 3.6 器高 4.0	内外面施釉。内面見込部にコンニャク印刷による五弁花文と二重圏線。	釉調：明オリーブ灰(5GY7/1)	胎土：灰白(10YR/1) 胎土：灰白(7.5Y8/1)	精良	堅緻	肥前系。残存1/3
62	磁器	碗（小丸碗）	口縁～底部	A区	口径（8.4）底径 3.6 器高 5.2	内外面施釉。外面口縁～胴部に矢羽模文。高台上部に二重圏線。内面口縁部に圏線。畳付に粕の拭き取り痕あり。	釉調：明オリーブ灰(2.5GY7/1)	胎土：灰白(2.5GY8/1)	精良	堅緻	肥前系。残存1/2
63	磁器	碗（解頭形碗）	胴部～底部	A区	底径（4.4）	内外面施釉。外面に粕の流し掛け。内面口縁部と見込部に圏線とコンニャク印刷による五弁花文。畳付に粕の拭き取り痕あり。	釉調：明オリーブ灰(2.5GY7/1)	胎土：灰白(5GY8/1) 胎土：灰白(5Y8/1)	精良	堅緻	肥前系。青磁染付。残存1/2
64	磁器	碗（端反碗）	口縁～底部	A区	口径（10.0）底径 4.7 器高 6.0	内外面施釉。内面に山水格闘文。内面見込部に梅唐文。畳付に粕の拭き取り痕あり。	釉調：灰白(N8/1)	胎土：灰白(N8/1)	精良	堅緻	肥前系。残存1/2
65	磁器	碗（端反碗）	口縁～胴部	A区	口径（10.7）	内外面施釉。外面に蜀椒文と圏線。内面口縁部に四方唐文。見込部に圏線。	釉調：灰白(N8/1)	胎土：灰白(N8/1)	精良	堅緻	肥前系。残存1/5
66	磁器	碗（端反碗）	口縁～胴部	A区	口径（8.2）	内外面施釉。外面に型紙刷りで、口唇部に口紅。	釉調：白(N9/1)	胎土：灰白(N8/1)	精良	堅緻	肥前系。残存1/4
67	磁器	碗（小広東碗）	口縁～底部	A区	口径（7.0）底 径（2.6）器高 3.6	内外面施釉。外面にねじ花文。	釉調：灰白(N8/1)	胎土：灰白(10YR/1)	精良	堅緻	肥前系。残存2/5
68	磁器	碗（小広東碗）	口縁～胴部	A区	口径（7.4）	内外面施釉。外面に「竜」の文字。	釉調：灰白(7.5YR/1)	胎土：灰白(7.5YR/1)	精良	堅緻	肥前系。残存1/6
69	磁器	碗（小広東碗）	胴～底部	A区	底径（3.2）	内外面施釉。外面に梅文。内面見込部に圏線。	釉調：灰白(5Y8/2)	胎土：灰白(5Y8/1)	精良	堅緻	肥前系。残存1/5
70	陶器	皿	底部	A区	底径 4.2	外面施釉。内面に胎土目痕あり。外面にヘラ削りが見られる。	釉調：褐褐(10YR3/4)	胎土：黒褐(10YR2/2)	1mm以下の灰白色・黒色・褐褐色の粒を多く含む。	堅緻	肥前系。
71	磁器	皿	底部	A区	底径（8.8）	内面と高台外部、高台内の部分は施釉。内面に花弁文と二重圏線。蛇ノ目凸形高台。	釉調：灰白(10Y7/1)	胎土：灰白(10YR/1)	精良	堅緻	肥前系。
72	磁器	皿（輪花皿）	口縁～底部	A区	口径 10.3 底径 5.1 器高 2.6	内外面施釉。口唇部に口紅。外面は無文。内面には水禽文。	釉調：明青灰(10BG7/1)	胎土：灰白(N8/)	精良	堅緻	肥前系。残存1/2
73	磁器	皿（輪花皿）	口縁～底部	A区	口径（12.8）底径 8.0 器高 3.5	内面と高台外部、高台内部は施釉。蛇ノ目凸形高台。	釉調：灰白(N8/1)	胎土：灰白(7.5YR/1)	精良	堅緻	肥前系。残存2/3
74	磁器	鉢（八角鉢）	口縁～胴部	A区		内外面施釉。内面口縁部に唐草文による施文。口紅。外面無文。外面は雷文帯と菊束の文様。	釉調：灰白(5YR8/1)	灰白(N8/)	精良	堅緻	肥前系。
75	陶器	壺	口縁～胴部	A区		内外面施釉。	釉調：褐褐(7.5YR3/4)	釉調：褐(7.5YR4/4) 胎土：灰白(2.5Y8/2)	精良	堅緻	肥前系。
76	磁器	弘服碗	杯部～胴部	A区	口径（5.6）底径 2.0 器高 4.8	外面施釉。外面に赤・青・緑の色絵。内面無文。	釉調：灰白(N8/1)	胎土：灰白(7.5YR/1)	精良	堅緻	肥前系。残存2/3
77	磁器	小杯	口縁～底部	A区	口径（5.8）底径 2.2 器高 2.6	内外面施釉。内面見込部にイッチンによる草花文・圏線・文様帯。外面無文。	釉調：灰白(10Y8/1)	胎土：灰白(7.5Y8/1)	精良	堅緻	肥前系。残存1/2
78	陶器	蓋（土瓶）	天井～口縁部	A区	つまみ径 1.8 口径 7.5 底径 9.6 器高 2.4	内外面施釉。内面無釉。	釉調：緑灰(5G6/1)	胎土：灰白(5Y8/2)	精良	堅緻	肥前系。ほぼ完形
79	磁器	蓋（広東碗）	天井～口縁部	A区	つまみ径 5.6 口径 9.8 器高 2.7	内外面施釉。外面に草花文。内面に寿文字と圏線。	釉調：明青灰(10BG7/1)	胎土：灰白(N 7/)	精良	堅緻	肥前系。残存2/3。
80	陶器	壺	口縁～胴部	B区	口径（14.4）	外面施釉。内外面は回転ナデ。内面に指頭痕あり。	釉調：にぶい褐(7.5YR5/3)	胎土：明赤褐(2.5YR5/8)	1mm以下の黒色・褐色の粒をわずかに含む。	堅緻	荒焼。残存1/6
81	陶器	鉢	天井～口縁部	A区	口径（14.2）底径（16.8）器高 3.4	外面施釉。内面無釉。	釉調：灰黄褐(10YR5/2)	胎土：橙(5YR7/6)	1mm以下の灰色・灰白色・黒色の粒を多く含む。	堅緻	備前系。残存1/6
82	陶器	土鍋	口縁～胴部	A区	口径（15.6）	内外面施釉。回転ナデ。	釉調：明オリーブ褐(2.5Y3/3)	胎土：赤褐(10R4/4)	微細な灰白色・灰色・光沢粒を多く含む。	堅緻	備前系。残存1/8
83	陶器	碗	胴～底部	A区	底径（3.9）	内面・外面胴～腰部施釉。外面高台無釉。削り出し高台（海鼠き状）	釉調：灰黄(2.5Y7/2)	胎土：浅黄(2.5Y7/3)	きめ細かで含有物は、ほとんど無い。	堅緻	萩焼。残存1/5

No.	種別	器種	部位	出土地点	法量 (cm)	文様・調整の特徴	色調 外面	色調 内面	胎土の特徴	焼成	備考
84	陶器	壺類	口縁～胴部	B区	口径（31.6）	内外面は回転ナデと横ナデによる調整。内面に日条を単位とする線目。口縁部外部に2本の石線。	外面：明赤褐（5YR5/6）	内面：にぶい橙（5YR6/4）	1mm以下の灰色・灰白色・黄橙色の粒を多く含む。	堅緻	備前系。残存1/8
85	陶器	壺類	口縁～胴部	A区		内外面は回転ナデと横ナデによる調整。内面に日条を単位とする線目。口縁部外部に2本の石線。	外面：にぶい赤褐（2.5YR5/4）	内面：にぶい赤褐（2.5YR4/4）	1mm以下の灰色・灰白色の粒を多く含む。	堅緻	備前系
86	陶器	壺類	底部	A区		外面は工具による回転ナデと横ナデによる調整。内面に放射状の線目。	外面：褐灰（10YR4/1）	外面：褐灰（10YR4/1）	1mm以下の灰白色・浅黄橙色の粒をわずかに含む。	堅緻	備前系
87	陶器	鉢（段鉢）	天井～口縁部	A区	口径（5.8）底径（7.5）器高 1.3	外面施釉。口唇部に口紅。	釉調：灰白（2.5Y8/2）	胎土：灰白（2.5YR8/1）	1mm以下の褐色の粒をわずかに含む。	堅緻	関西系。残存2/3
88	陶器	碗	口縁～底部	A区	口径（8.4）底径（2.9）器高 4.5	外面施釉（胃入手し）・無文。高台脇～高台内面にかけて無釉。	釉調：灰白（5GY8/1）	胎土：灰白（2.5GY8/1）	精良	堅緻	関西系。残存1/3
89	陶器	皿	口縁～胴部	A区	口径（25.4）	内外面施釉。内面に釉の流し掛け。	釉調：灰白（5Y7/2）	胎土：灰白（5Y8/2）	1mm以下の褐色の粒をわずかに含む。	堅緻	瀬戸・美濃系。残存1/6
90	磁器	碗（端反碗）	口縁～胴部	A区	口径（8.4）	内外面施釉。外面に胴部に寿文字・松。外面口縁部と腰部、内面口縁部と見込上位に圏線。	釉調：灰白（7.5YB/1）	胎土：灰白（5YB/1）	精良	堅緻	瀬戸・美濃系。残存1/3
91	陶器	碗（小杯碗）	胴～底部	A区		高台内面以外は内外面施釉。外面に若杉文。	釉調：灰白（10YB/1）	胎土：浅黄（2.5Y7/3）	精良	堅緻	伊東系。残存1/8
92	陶器	片口	口縁～底部	A区	口径（29.7）底径（17.8）器高 15.3	高台内面以外は内外面施釉。内面に胎土目痕あり。	釉調：オリーブ灰（5Y6/4）	胎土：オリーブ黄（5Y5/6）	精良	堅緻	残存1/2
93	磁器	瓶類		B区	長さ 5.8 幅 1.4 孔径 1.1	外面施釉。内面無釉。	釉調：灰白（10YB/1）	胎土：灰白（5YB/1）	精良	堅緻	完形

第9表　銭貨・金属製品・土製品・石製品観察表

No	器種	材質・石材	出土地点	計測値 最大長（cm）	計測値 最大幅（cm）	計測値 最大厚（cm）	計測値 重量（g）	備考
94	寛永通宝	銅	A区	2.3		0.12	2.1	孔径 0.62 cm
95	寛永通宝	銅	A区	2.3		0.13	2.8	孔径 0.57 cm
96	柄鏡	銅	B-1	7.7	7.7	0.28	92.2	「小橋豊後守友重」の銘有り
97	鞴の羽口		A-1	8.8	6.0	2.1	116.7	
98	砥石	頁岩	B-7	6.5	2.7	1.7	31.3	
99	砥石	凝灰岩	A-1	5.8	3	0.6	19.2	
100	砥石	凝灰岩	B区	10.9	5.2	4.7	333.5	
101	砥石	凝灰岩	B区	9.9	6.2	4.5	404.3	
102	砥石	凝灰岩	B区	7.5	6.9	2.0	189.9	
103	火打石	玉髄	A-1	1.8	1.1	0.4	0.8	
104	火打石	玉髄	A-1	1.3	1.6	0.8	0.9	

第Ⅳ章　まとめ

1　旧石器時代

約25,000年前に現在の鹿児島県錦江湾の姶良カルデラが大噴火し、入戸火砕流が発生した。この火砕流によって堆積した大量のシラスがそれ以前の旧地形を覆ったため、宮崎県南部の南那珂地域（日南市（平成21年4月1日に日南市・北郷町・南郷町が合併）、串間市）は、旧石器時代の遺跡の発見が困難な地域となっている。

これまでの発掘調査でこの地域で旧石器時代の遺構・遺物が確認された遺跡は、串間市の留ヶ宇戸遺跡（串間市大字奈留字留ヶ宇戸）と後藤野遺跡（串間市大字奈留字後藤野）の2遺跡にとどまっている。

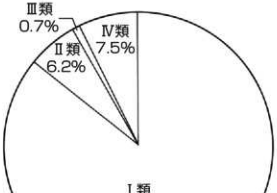
今回の調査で本遺跡から旧石器時代の2点の剥片（第11図　6,7）が出土した。これは、串間市以外では初めての事例である。これらの剥片は、正確な年代を特定することはできなかった。しかし、これまで串間市奈留地区のみに留まっていた旧石器時代の遺物の分布範囲が新たに日南市北郷町郷之原地区にも広がったことで大きな意味をもつと考えられる。

また、確認調査で出土した2点の剥片（第2図4,5）も石材の選択と石器製作上の技術的な特徴から旧石器の可能性が考えられる。今後県南地域の旧石器時代の調査が進み、比較・検討する資料が蓄積されることで、これらの正確な年代等が明らかになることを期待したい。

2　縄文時代

今回の調査では縄文時代早期の包含層から散礫と集石遺構1基を検出した。集石遺構は遺跡が傾斜地に立地していたため、元来の形状は留めておらず、谷部へ落ち込むような形で検出された。また、掘込みや敷石なども確認できなかった。

本遺跡の西に位置し、同じく広渡川流域の丘陵上に立地する柿ヶ迫遺跡（日南市北郷町北川内字柿ヶ迫）では8基の集石遺構が検出された。この内、掘込みを有するものは5基、掘込みのないものは3基であった。



第26図　縄文時代早期土器重量割合図

近隣の遺跡で掘込みを有するものが多数を占めていたことを見ると本遺跡の集石遺構は、この地域における少数派に属するものと考えられる。

遺物では、確認調査と本調査で縄文時代早期の土器が出土した。これらは文様によって

Ⅰ類　貝殻条痕文を施したもの。

Ⅱ類　貝殻腹縁刺突文を施したもの。

Ⅲ類　貝殻による施文がなく、無文に近いもの。

Ⅳ類　撚糸文の後、棒状工具で沈線文を施したもの（塞ノ神式）。

の4つに分類できる。これらの出土割合を重量で表したグラフが第26図である。この図を見ると、本遺跡の特徴としてⅠ類・Ⅱ類の貝殻によって施文された土器が全体の9割以上を占めていることがわかる。

これは貝殻条痕文、貝殻腹縁刺突文、篦状工具による沈線文の3つの文様形態の土器が出土した曽和田遺跡（北郷町北川内5333番地　広渡川支流の黒荷田川西側の標高約220mの山間傾斜地に立地）と類似する点が見られる。

一方、大原遺跡（北郷町郷之原字大原　広渡川北側の花立山から南に伸びる標高288mの台地上に立地）と柿ヶ迫遺跡では貝殻条痕文が出土せず、前者では平栫式と塞ノ神式の2つの文様形態、後者では押型文、手向山式、塞ノ神式、貝殻腹縁圧痕文、凸帯文と縄文・沈線文といった5つ文様形態の土器が

出土しており、本遺跡とは異なる様相を示している。

石器では、黒曜石に腰岳・姫島・上牛鼻・産地不明（霧島産か？）の４つの産地のものがあることとその他の石材の剥片に尾鈴山酸性岩類の溶結凝灰岩が確認された。これらは、縄文時代において石材を介して宮崎県南部と宮崎県中央部、九州北部、九州北西部、薩摩半島西部との交流が盛んに行われていたことを示す１つの資料になると考えられる。

3　近世以降

出土した陶磁器の時期をみると 18 世紀後半から 19 世紀のものが多い。産地では、肥前系のものが多数を占め、これに薩摩、備前、瀬戸・美濃、萩、関西、信楽、琉球の荒焼が加わる。

かつて宮鶴地区に在住していた森山隆義氏（日南市北郷町在住　昭和 11 年生）によると宮鶴第２遺跡から北東方向の山に 500 m程入った場所に地元で「牧野内」と呼ばれる平坦部があり、かつて飫肥藩の牧場があったということである。

また、郷ノ原地区の中心部を通り旧大藤村に抜ける飫肥街道は昭和 30 年代まで地元住民の幹線道路として使用され、広渡川に橋が架かる以前は、（旧北郷町の）中心街に行くには宮鶴から南の梅檀地区まで行き、そこから川の浅瀬を渡って向かったそうである。

飫肥藩の牧場が作られた時期は定かではないが、江戸期において藩の施設が存在したことから、ここに滞在する人々の生活の拠点があり、それを支える物資が飫肥街道やその他の間道を通じてもたらされていたことは想像に難くない。また、出土した各地の陶磁器も飫肥街道によってこの地に伝わったことがうかがえる。

【引用参考文献】

・北郷町教育委員会 1993 『笹の窟遺跡　大原遺跡』北郷町文化財調査報告書第３集
・北郷町教育委員会 1995 『昼野上Ｃ地区遺跡　姉ヶ迫遺跡』北郷町文化財調査報告書第８集
・北郷町教育委員会 2003 『曽和田遺跡』北郷町文化財調査報告書第 12 集
・北郷町教育委員会 1990 『北郷町遺跡詳細分布調査報告書』
・串間市教育委員会 1994 『猪之槌遺跡　留ヶ宇戸遺跡』串間市文化財調査報告書第 11 集
・串間市教育委員会 1995 『開尾遺跡　村上遺跡　後藤野遺跡』串間市文化財調査報告書第 12 集
・平部嶋南　1929『日向地誌』日向地誌刊行会
・竹内理三　1986『角川日本地名大辞典・45　宮崎県』角川書店
・平凡社地方資料センター　1997 『宮崎県の地名・日本歴史地名体系・46　宮崎県』平凡社
・甲斐亮典編　2007 『図説宮崎・南那珂・東諸の歴史』郷土出版社

図　　版

A区全景(遺跡上方から)

B区全景(遺跡上方から)

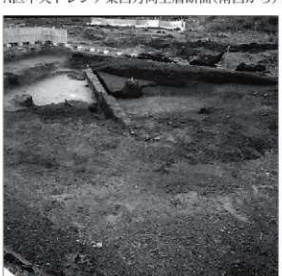
図版2

調査区全景(南東から)

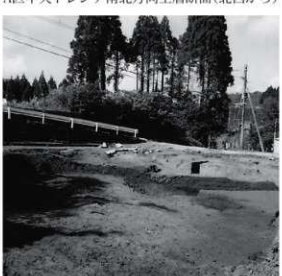
A区全景(北東から)

A区中央トレンチ東西方向土層断面(南西から)

A区中央トレンチ南北方向土層断面(北西から)



B区全景(南から)



B区中央トレンチ土層断面(北東から)

散礫検出状況(南東から)

1号集石遺構検出状況(北から)

散礫内遺物出土状況(北西から)

散礫内遺物(土器)出土状況(東から)

散礫内遺物出土状況(東から)

図版4

1号土坑完掘状況(北から)

2号土坑完掘状況(南東から)

3号土坑完掘状況(北から)

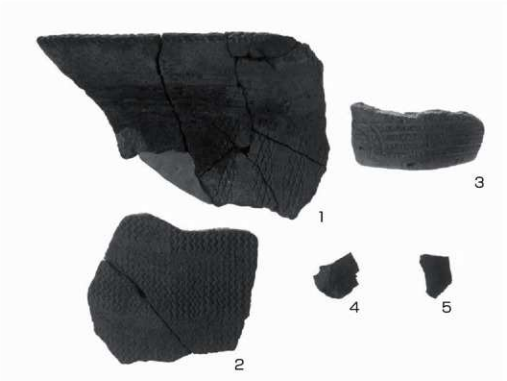
4号土坑検出状況(南東から)

A区完掘状況(北東から)

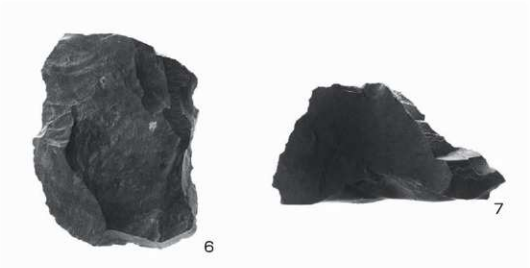
B区完掘状況(西から)

作業風景

台風13号の雨で水没したB区



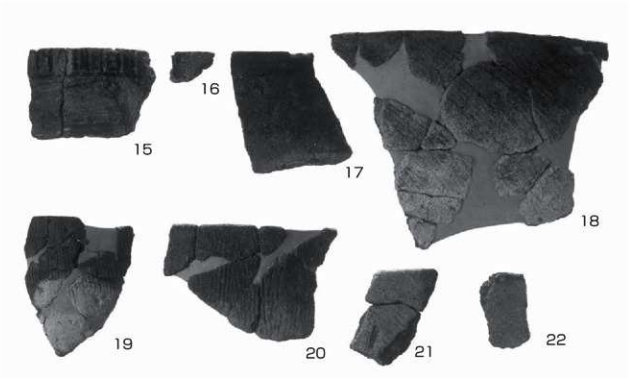
確認調査出土遺物



旧石器時代遺物

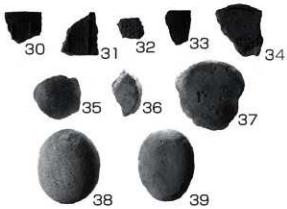
図版6

1号集石遺構出土遺物



縄文時代早期出土遺物1

縄文時代早期出土遺物2



縄文時代早期出土遺物3

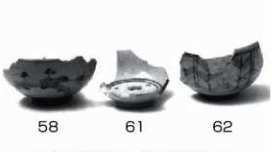
包含層以外の出土遺物(縄文時代)1

包含層以外の出土遺物(縄文時代)2

包含層以外の出土遺物(縄文時代の石器・弥生土器)

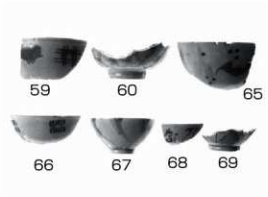
中世の遺物(青磁)

図版8



近世以降の遺物　磁器(肥前系)1

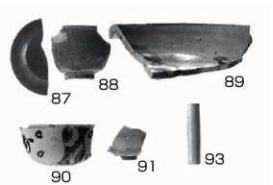
近世以降の遺物　磁器(肥前系)2



近世以降の遺物　磁器(肥前系)3

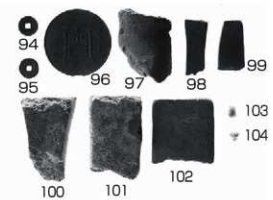
近世以降の遺物　磁器(肥前系)4

近世以降の遺物1



近世以降の遺物2

近世以降の遺物　片口



近世以降の遺物(銭貨・金属製品・土製品・石製品)

報告書抄録

ふりがな	みやづるだいにいせき
書名	宮鶴第２遺跡
副書名	東九州自動車道（清武～日南間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書１
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第１８７集
執筆・編集担当者名	崎田 一郎
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター
所在地	〒880-0212　宮崎県宮崎市佐土原町下那珂４０１９番地
発行年月日	２０１０年２月１２日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みやづるだいにいせき 宮鶴第２遺跡	みやざきけん 宮崎県 にちなん 日南市 きたごうちょう 北郷町 ごうのはらあざみやづる 郷之原字宮鶴 1538番地他	45204		31 度 41 分 20 秒	131 度 24 分 16 秒	平成20年 8月4日 ～ 平成20年 10月10日	1,680 ㎡	東九州自動車道（清武～日南間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
散布地	旧石器時代		二次加工剥片	
	縄文時代早期	集石遺構１基、散礫、土坑３基	土器（塞ノ神式・知覧式等）、石器（石匙・石錐・石斧・敲石・剥片）	
	弥生時代中期		土器	
	中世		青磁	
	近世以降	土坑１基・ピット１２基	磁器、陶器、銭貨、金属製品（和鏡）、土製品（鞴）、石製品（砥石・火打石）	

要　　約

宮鶴第２遺跡は、日南市北郷町の広渡川と猪八重川の合流地点の北岸に位置する。遺跡は南向きのゆるやかな斜面に立地し、遺跡の東に郷谷山と谷之城山の谷から発する渓流が流れる。

調査は、調査区北側のアカホヤ火山灰層と南側の縄文時代早期の包含層の精査を中心に平成 20 年 8 月 4 日から 10 月 10 日にかけて行った。その結果、遺構では縄文時代早期の集石遺構１基、散礫、土坑３基の他近世以降の土坑１基、ピット 12 基を検出した。遺物では、宮崎県南部では事例の少ない旧石器時代の剥片が２点出土した。また包含層から貝殻条痕文や楔形突帯を施した土器や敲石等の石器が出土した他、それ以外の層からも縄文時代の石器（石匙・石錐・石斧・敲石・剥片）、弥生土器、中世の青磁、近世の陶磁器等が出土した。

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第187集

宮鶴第２遺跡

東九州自動車道(清武～日南間)建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書１

2010年２月12日

発　行　宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212　宮崎市佐土原町下那珂4019番地

TEL 0985(36)1171　　FAX 0985(72)0660

印　刷　有限会社　宮崎新生社印刷

〒880-0124　宮崎市新名爪中牟田766番地

TEL 0985(39)6148　　FAX 0985(39)4240